恋する赤鬼

鯉庵

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
恋する赤鬼

【Ｎコード】
Ｎ７３７０Ｓ

【作者名】
鯉庵

【あらすじ】
『ぬらりひょんの孫』には一人の許嫁が居た……その名は『魅琉鬼』。人五百。妖五百。合わせて千の血を浴びた女――――その髪は真紅に染まり、その瞳は黄金に輝く。百鬼夜行の主の隣を歩む女、『魅琉鬼』の恋物語。

※どうも鯉庵です。ヒロインは魅琉鬼だけです。つらら、カナ、ゆらが好きな方は見ない方がいいです。

中二病、エロゲ脳なので苦手な方は読まない方がいいです。

また、思いつきで書くので更新は不定期です

設定（前書き）

まだ、処女作の連載が終わってないのに思いつきで書きます。オリジナルヒロイン物。

リクオ、魅琉鬼の恋愛を中心に書いていきます。よろしくお願いします

設定

【名前】
・魅琉鬼（みるき）

【人間変化時】
・魅姫（みき）

【年齢】
・人間で言うと15歳

【性別】
・女性

【容姿】
・髪は赤髪が腰の辺りまであるロングのストレートヘア
・瞳の色は金色
・妖怪時は耳が長い
・私服は基本着物
・名前の通り人、妖怪共に「魅」せる美しい女
・背中には般若面の彫り物を彫（いれ）ている

【性格】
・良妻賢母
・リクオ以外にはひたすらにドS
・リクオ命
・リクオ以外の男は風景
・痴女
※これらをキーワードに連想してください

【武器】
・仕込和傘

【魅琉鬼の設定】

人を五百人。妖怪五百匹を斬って妖怪になった女。元々は領家の娘だったが妖怪に皆殺しにされ天涯孤独に。生きるために人や妖怪を斬りすぎたため自身も妖怪になった。返り血浴び続け黒かった髪が赤く染まる。

仕込傘を武器に使用するのは斬った相手の返り血を浴びないため。

リクオが初めて覚醒する少し前にぬらりひょんが奴良組本家に連れてきた。

当時、妖怪に成り立てだったため屋敷に来たときはリクオと同じ子供の姿だった。

リクオに尽くす事を生きがいとしており全ての行動源。

『夫の後ろを三歩下がって歩く』を信条にしており何かとリクオを立ててくれる姉さん女房

設定（後書き）

中二全開ですね

プロローグ（前書き）

頑張ります

プロローグ

「リクオ、お前さんに話がある。来なさい」

「ん？話って……？」

リクオが少し緊張した顔つきになる。

いつも飄々とした態度の祖父がこの時は、『総大将』としての顔でリクオに話しかけて来たからだ。

奴良組初代総大将大妖怪『ぬらりひょん』。

その昔、百鬼夜行を率いて数々の伝説を残した大妖怪。

一度は息子であり、リクオの父でもある『奴良鯉伴』に跡目を継がせ自身は引退したが『ある事情』により鯉伴が夭折したため現在は再び総大将の座に就いている。

祖父の部屋に入ると自分の正面に座るようリクオに促した。

広々とした和室。

２０畳以上あるその部屋は中央が襖で仕切られており、奥の方には大きな仏壇が置かれていた。

「リクオ、今日はお前の嫁になる女子を紹介しようと思っての……」

「は？嫁？」

予想していた物よりも遥か斜め上を行く事を告げられ、唖然とするリクオ。

「魅琉鬼。出てきなさい」

……はい……。

凛とした声と共に少女は現れる。

ふわり、と天から降り立った少女はそのままぬらりひょんの隣に正座した。

「お初にお目に掛ります。私、魅琉鬼と申します。今日から貴方様の妻になる為、こちらでお世話になる事になりました。以後、お見知り置きを……」

腰まで伸びた紅い色の髪に尖った耳。

肌は雪の様に色白で、瞳の色は黄金。

年に似つかない落ち着いた声色と言葉遣い。

リクオは少女に『魅』入っていた。

いろいろと突っ込みたい事は山ほど有ったがそれが全て吹き飛ぶ程の衝撃。

深々と下げていた頭をゆっくりと上げるとふわりと優しく微笑む。

リクオの心臓がドクンと大きく跳ね上がる。
動悸は激しくなり、呼吸する事も忘れていた。
「リクオ様？」
名前を呼ばれ、我に返る。
「私の顔に何か可笑しなものでも付いていますか……？」
不安そうな顔で尋ねられ慌てて否定する。
「そ、そんな事ないよ！寧ろその逆で……すごく綺麗で見惚れてたんだ……」
魅琉鬼は一瞬驚いたように瞳を見開いた後、口元に手を当てて嬉しそうに笑った。
「まぁ……♪本当ですか？ありがとうございます……」
「……〜ッ！！」
紅い顔をさらに紅くしてリクオが俯いた。
二人のやり取りを黙ってみていたぬらりひょんが口を端を釣り上げにやり、と笑った。

リクオと魅琉鬼の恋物語が今、幕を上げる……

プロローグ（後書き）

いかがだったでしょう？誤字脱字、表現等で間違いがございましたらお知らせください

決意（前書き）

二話目……がんばりま～

決意

『後は若いもん同士好きにやれ』――――――……

そう言ってぬらりひょんは部屋を出て行った。

「（ど、どうしよ……緊張して何話せばいいかわからないよぉ……雪女や毛倡妓相手だったらこんなに緊張しないのに……）」

リクオは困惑していた。

リクオは決して異性に対して苦手意識や嫌悪感がある訳ではない。

寧ろ男女共に分け隔てなく楽しく会話することが出来るのだ。

しかし、今目の前にいる少女に対してはいつも通りに接する事が出来ない。

「（何で……今までこんな事一度も無かったのに……心臓の音も煩いし、顔が熱い……本当にどうなってんだ！？僕……）」

「――――ク……クオ――――リクオ様……？」

「ひゃい！？」

思考に没頭する余り魅琉鬼の呼ぶ声に反応しなかったリクオが初めて自分の名前を呼ばれている事に気付く。

眼前には美しい少女の顔。

驚きのあまり正座の体勢が崩れ、尻餅を着いてしまう。

「大丈夫ですか！？」

こちらも驚きリクオを起こそうと背中に手を回す。

「ってて……～ッ！！」

みるみる顔を紅くするリクオ。

「大変！！お顔が真っ赤ですよ！？」

「だ、大丈夫だから！！」

必死で異常が無いことを伝える……しかし……

「熱かあるのかも知れません！少々はしたないですが……失礼いたします……」

そう言ってリクオの額にぴと、っと自分の掌を当てる魅琉鬼。

顔から湯気が出てきそうなほど熱くなるリクオ。

「やはり……熱があるようです！直に人を呼んで参ります」

「ほ、本当に大丈夫だから！！」

慌てて袖を掴み止めるリクオ。

「は、はい……申し訳御座いません……少し出しゃばり過ぎてしまいました……」

些か強い口調で言われ驚く魅琉鬼。

「う、ううん！僕の方こそ大きな声出してごめん……心配してくれたのに……でも、本当に大丈夫だから……」

「……いえ、お気になさらないで下さい……本当に良かった……」

力が抜け、その場に座り込む。

「だ、大丈夫！？」

今度は打って変わって魅琉鬼を心配するリクオ。

「ええ……安心したら腰が抜けてしまいました……」

少し顔を赤らめ目尻に付いた雫を指ですくい、にっこりと笑う。

「（この娘……泣くほど心配してくれたんだ……それなのに僕は……）」

後悔すると同時に決意を固める。

「（よし！ここは僕がリードしてこの娘を安心させてあげなきゃ……！！）」

「ねぇ魅琉鬼ちゃん！！ずっと此処にいるのも退屈だろ？僕が町を

案内するよ！！」

「え……きゃっ」

そういって魅琉鬼の手を引くと上手く立ち上がることが出来ずリクオの方に倒れこむ。

「っとと、ご、ごめん！」

しっかりとリクオが抱きとめる。

「いえ……有難う御座います……」

頬を染め上げ微笑む。

「〜〜〜ッ！　じ、じゃ行こっか……」

「はい……」

しっかりと手を握り部屋を出る。

すると、部屋の外で覗き見していた者達が驚く。

「わ、若……これはですね……何と言いますか…そのぉ」

代表して雪女の氷麗が言い訳するがシドロモドロしていて通じない。

「はぁ……お前たち……」

盛大なため息を吐きながらジト目で睨む。

「今からこの娘と出掛けて来る……夕食までには戻るから、絶対ついて来るなよ！！」

念押しして家を出て行った。

襖の横で背を凭れながら煙管を吸っていたぬらりひょんが口を歪めて嗤う……

「ふぅ……漢を上げたじゃねぇか……リクオ」

決意（後書き）

如何だったでしょうか……？？

魅琉鬼の『琉』という字は『王』を目指す少年や青年を指す様です。自分も付けた後に気付きましたがちょっと運命的なものを感じました……

ご意見ご感想お待ちしています

血雨（前書き）

魅琉鬼ってこんな妖怪だよってな感じで書いてみました

怪談風になってればいいなと思ってます。

こうした方がそれっぽいよと思った方は是非アドバイスの程を

血雨

街道を、一人の女が歩く。

雲一つない快晴の空。

太陽が地面を焦がす。

だというのにこの女、この炎天下の中真っ黒な和服に身を包み、真紅の傘を差して歩いている。

紅い椿の刺繍が到るところに施された和服に、真っ赤な帯びを締め、紅い髪が風に揺れる。

すれ違う人間全てが振り返り、溜息を漏らす。

女の姿を目にしたものは、暑さを忘れただ、ただ、魅入る。

独特の甘い香りを放ち、人とは思えぬ美貌を用いて遍く全てを魅了する。

「お嬢ちゃん、この暑い中傘なんかさして何処へ行こうってんだい？」

突如、背後から男の声が聞こえる。

女は、足を止めて振り返ると、男に向かって一言。

「雨が……そう、雨が降りますから……」

軽く会釈をすると、男が小馬鹿にしたように肩を竦め、鼻で笑う。

「はーん……こんな雲一つない空の何処からそんなもんが降って来るんだい？」

女はゾクリとするような艶笑をすると……

「貴方からです……」

「……へ？」

男が素っ頓狂な声を上げた頃には、既に首と胴が斬り離せれていた。

「ああん？……何で……俺の……俺の……首が胴≪からだ≫から離れてんだ……？」

男の声が震える。

ぽたり、ぽたりと地面に落ちる紅い滴。

段々と勢いを増し、女の持つ番傘に容赦なく降り注ぐ。

周りの人々が悲鳴を上げる中、女は只一人ほくそ笑んでこう言った……

「……ほら、ねぇ……降ったでしょう……？？」

女は歩く。

血の雨の中を……

真紅の髪を揺らして、琥珀色の瞳を輝かせ、ただ歩く。

＞i283377—33314＜

血雨（後書き）

超久しぶりの更新。

不安です。

前書きにも書きましたが、是非ともアドバイスを

響（前書き）

鉄板ですが……

簪

二人並んで歩く。

時刻は夕暮れ。

鮮やかな赤色の陽が地平線に沈む頃、リクオと魅琉鬼はゆっくりと石段を登る。

「魅琉鬼ちゃん。大丈夫？此処の石段『心臓破り』って言われてて、僕でも結構キツいんだ……少し休憩しようか？？」

リクオは魅琉鬼を心配そうに見つめながら、彼女の手を引く。

少し、汗ばんだ掌からは緊張が犇々と伝わって来る。

「―――お気遣い……ありがとうございます……私≪わたくし≫の事なら心配は無用です……リクオ様こそ、先程から歩きづめでお疲れではございませぬか？」

口元を袖で覆い隠し、朗らかに微笑む。

「ぼ、僕は平気さっ……なんたってここら一体は僕の庭みたいなモンだからね！」

リクオは、額に汗を滲ませ、頭を掻く。

「（……可愛い人……）」

魅琉鬼は、心の中で呟くと、慈しむような瞳で見つめ、くすりと微笑む。

そうこうしている内に、紅い鳥居が見えてくる。

やっとの事で石段を登りきると、祭囃子や人の声で賑わう音が聞こえて来た。

今日は神社で縁日が行われ、奴良組の構成員も人知れず、畏を集めて居るのだ。

俗に言う『しのぎ』である。

「まぁ……賑やかでございますね……」

瞳を見開き、口元に手を添える。

「……あれ？魅琉鬼ちゃんこういうのは初めて？？」

リクオが不思議そうに魅琉鬼を見つめると、視線を逸らし、白い肌が桃色に染まる。

「……はい……恥ずかしながら……」

慌ててリクオがフォローをする。

「い、いや……恥ずかしがることじゃないよ！！？だからそんなに落ち込まないで」

ゆっくりと顔を上げ、安心したように微笑む。

「！！！！！」

忽ち顔を紅くして勢い良く顔を背ける。

「きょ、きょ！今日は僕が美味しい物とか楽しい事とか一杯教えてあげるよ！！！」

そう言って、魅琉鬼の腕を引く。

くすくすと笑いながらリクオの速さに合せ、走り出す。

射的や金魚すくい、型抜きや、リンゴ飴に綿菓子。

有りと凡ゆる出店や出し物を堪能すると、神社の裏手に回り、リクオが顔を赤らめながら何かを言い出そうとしている。

二人きりの時間がゆっくりと流れる。

一秒が一分に、一分が一時間にも感じられ、無言の空間を作り出す。

やがて、リクオがぐいっと片腕を魅琉鬼の目の前に突き出す。

緊張した様子で、声を震わせながら喋り出す。

「あ、あの……これっ！君に似合うと思って！！！」

握りこぶしを、開くと掌には一本の簪が……

白椿に藤の花が垂れており、可愛らしい物だった。

「まぁ……これは……」

魅琉鬼が驚きの声を上げる。

目尻から、一雫の涙が魅琉鬼の頬を伝う。

「どどどどうしたの！？だだだ大丈夫！？」

慌てふためくリクオ。

魅琉鬼が自らの指で雫を拭き取ると花が咲くような微笑みを浮かべる。

「違うのです……これは嬉し涙でございます……贈り物など初めて頂いたものですから……」

「そ、そんな……本当はもっと綺麗な物があったんだ……けど、僕のお小遣いじゃ買えなくて……」

言いながら肩を落とす。

「いいえ……私は幸せでございます。こんな素敵な贈り物を貴方様から……リクオ様が下さるなんて……こんなに嬉しいことはありません……」

幸せそうに微笑む魅琉鬼。

「！！」

リクオは、頭からボンっという音を立てて、硬直する。

「お慕い申し上げます……この魅琉鬼……命尽きるまで、貴方様のお傍に……」

これは、魑魅魍魎の主を魅了し、百鬼夜行を共に歩む鬼の物語。

簪（後書き）

丁寧な言葉遣いってこんなんでおk？

追憶（前書き）

魅琉鬼が人間だった頃のお話。

異常です

追憶

心地よい雨の音――――……

真っ赤な番傘を差し、女がゆっくりと歩む。

黒い着物に紅い帯、至る所に椿の刺繍が施されている。

漆黒の黒髪を、腰のあたりまで伸ばし、色白の透き通るような柔肌。

見る者全てを魅了する美しさ。

女特有の甘い香りを放ち、長い髪を揺らし歩く。

ふと、歩く足がぴたり、と止まる。

「あら……珍しいお客さんです事……狗さんが私(わたくし)に何の御用です……」

女は口元に手を当て、くすりと微笑む。

「椿　魅姫殿(つばき・みき)とお見受けする……我らが主の名により御命頂戴致す……」

黒尽くめの忍装束に、口元を覆面で覆い隠した男が、宣言と共に魅姫との距離を一気に詰め、手裏剣を放つ。

番傘を開き、手裏剣を受けると、そのまま頭上へと放り投げ、仕込刀で忍の股間から脳天に掛け、真っ二つに斬り、裂けた身体から大

量の血潮が、魅姫目掛けて吹き掛り、顔や着物を汚す。

「――――ふぅ……狗の血でせっかくの着物が台無しね……」

溜息を吐くと、頭上から落ちる傘を受け取り、刀を傘に戻す。

「あら、困りました……こんなに大勢の殿方に迫られては照れてしまいますわ……」

四方八方を忍が飛びかかり、魅琉鬼に襲いかかる。

仕込刀を逆手に持ち、敵の首や腕、足を斬り落とし、どす黒い血で魅琉鬼を汚していく。

「一つ、二つ、三つ……あぁ……素敵……こんなにも血を浴びたのは久しぶりだわ……さぁ……貴方方は、どんな血飛沫で私を汚して下さるのかしら……お好きな場所を選んで頂いて構いませんよ……頸？それとも腕？……足と言うのも捨てがたいですね？無様に地を這う姿は、何とも言えませんわ……」

忍達は後ずさる。

足と手を斬り落とした男が、懸命に足首掴もうと、残った手を伸ばす。

魅琉鬼は妖艶に嗤うと、頭に刀を刺し、ぐり、と抉る。

頭から大量の血が噴水の様に吹きだし益々汚れて行く。

黒かった髪も、どす黒い紅い色に染まる。

「あれだけ、刻んだにも関わらず、よくも動けるものですね……関心してしまいます……キヒッ……ヒッ……あはっ……あはははははははははは！！！！！！！！はははははははははははっ！気持ちいい……血を浴びるとその者の命その物を浴びている気が致します……温かくて、汚くて、臭くて、不味くて、どうしようもなく美しい……花と同じでございます。散り際が最も美しいのですね……」

腹を抱えて嗤い、冷徹に、残酷に、妖しく、美しく、漆黒の瞳に火が灯る。

付け根から刃先へゆっくりと舌を這わせる。

「どうなされたのですか……？先程からそんなに怯えた顔をされて……忍足る者感情を剥き出しに恐れて居ては務まりませんね……使えない狗には消えて頂いた方が、貴方方の主も手間が省けて良うございましょう……？一人一人丁寧に斬り落として差し上げます……」

そう言うと、瞬く間に背後へと移動し、頚に刃を刺す。

刺された忍が震える手で刀身を握ると、血溜まりにぽたぽたと落ちる滴。

勢い良く引き抜くと、血潮を吹きながら、力なく倒れこむ。

鞘に刀を納め、抜刀の構えを取ると、帆を描くように後方へ飛び、首を切り落とす、着地と同時に、襲い掛かる敵の刃を番傘で防ぎ、刀を逆手に持ちかえて、回転斬りで両腕と、胴を斬り、真っ二つに裂ける。

傘は無残引き裂かれ、骨の部分もへし折れている。

「お気に入りでしたのに……」

肩を落とし内刀。

すると、辛うじて生きていた忍びの一人が魅琉鬼の足首にクナイを突き差す。

魅琉鬼がその忍びの眼球に、刀を突き刺して、トドメを刺す。

「ッ！」

片目を閉じ、激痛に耐える。

一瞬の隙を突き、二人の忍が鎖で魅琉鬼を拘束し、締め上げる。

背後に居た敵が、鉤爪で背中を斬り裂く。

「ぐっ……」

前屈みになるも、必死に踏みとどまる。

足首から大量の血が吹き出て、魅琉鬼が苦悶の表情を浮かべる。

鎖罐を持った二人組が飛びかかって来た瞬間、つま先で傘を踏み、立ち上がった傘から口で柄を咥え、引き抜き、二人を斬り裂く。

その後、傷ついた足の痛みに耐えながら襲い掛かる敵を斬っていく。

銀色の斬影が鋭く舞う。

力が足りず、胴や首を切り落とす事が困難になるが、力を振り絞り斬殺していく。

最後の一人を斬り終えると、ふらふらと歩み、倒れる。

うつ伏せの体勢から仰向けに転がり、息を吐く。

「毒……ですか……眼が霞んで来ました……」

薄れゆく意識の中、地面に眼をやると、紅い血溜まりが広がっていた。

「ふふっ……自分の血を見るのは久しいですね……相変わらず厭な色……ごふっ」

口から血が泡となって吹きだす。

「いよいよダメですね……ふふっ……短い一生でした……女の身で有りながら恋の一つも出来ず朽ちるのが、悔やまれますね……来世では素敵な殿方と恋という物がしとうございます……恋は女を輝かせる物なのでしょう……？ねぇ……お母様……」

静かに瞼を閉じると、紅い涙が零れ落ちる。

……享年１５……

椿の魅姫。その生涯を終える。

追憶（後書き）

戦闘描写不安で堪らない！！！！！！！！！！

此処で、感想を頂いた方にお詫び申し上げます。

長らく返事を出さず、申し訳ございませんでした。

今後は、このような事がないよう注意致します。

ご指摘・感想お待ちしてます

魅琉鬼イラスト（前書き）

えー……親愛なる絵師様による魅琉鬼でございます。

え？

お前、他力本願過ぎる？？

ええ、私はイラスト描けませんが何か……？？

仕方ないじゃないですか！！！？

素敵過ぎてみんなに見てもらいたいのです。←バカ

魅琉鬼イラスト

＞ｉ２６９９７―３３１４＜

素敵過ぎるｗ

椿の花はその花弁が落ちる様から『首切り花』と呼ばれているらしいですｗ

魅琉鬼さんにぴったりｗ

間違ってたら恥ずかしい

着物の柄は絵師様が小説を読んで考えてくれました。

俺ってマジ幸せ者。

こんなにイメージ通りに描いてくれるなんて！

俺ビックリｗ

＞ｉ２６９９８―３３１４＜

夜リクオと魅琉鬼。

キャ！素敵！！

カッコええです〜！！

一体どんな会話をしているのでしょう？？

魅琉鬼イラスト（後書き）

えー……他力本願で申し訳ありません。

でも、我慢できず載せちゃいましたw

鬼ごっこ（前書き）

やばいよ！！！

鬼ごっこ

――――――水滴が頬を伝う。

辺りから腐敗した臭いが漂う。

嘔吐物や糞の混ざった臭い。

魅琉鬼がゆっくりと瞼を開くと、其処は冷たい岩盤の上だった。

こびり付いて固まったどす黒い血に剣山の岩山。

「此処は――――――……」

体勢を起こし、周りを見渡すと人ではない生き物がにたにたと、いやらしい視線で魅琉鬼を見つめている。

肋骨が浮き出るほど痩せており、腹部は風船の様に膨らんでいる。

どす黒い赤色の肌に黄ばんだ鋭い牙。

舌の色は紫色で、疣のが幾つもあった。

『ようやくお目覚めかい……？可愛い可愛いお嬢さん。何時まで経っても起きやしないから心配したよ？』

小さな赤鬼がゆっくりと魅琉鬼の元へ歩む。

「……あら、ありがとうございます……ご心配をお掛けして申し訳

ございません……心からお礼申し上げます……何かお礼をさせて頂けませんか……？」

恭しくお辞儀をして、小鬼の返答を待つ。

『そうさなぁ……では、そなたを食べさせておくれ』

そう言うと、人を丸呑み出来るほどの大口を開け、魅琉鬼に襲い掛かる。

しかし、魅琉鬼は眼にも止まらぬ速さで、その鬼の顔を真っ二つに斬り裂く。

「酷い臭い……鼻が腐ってしまいそう……」

ぞろぞろと岩山から現れる小鬼達。

皆がその醜く歪んだ口からねっとりとした涎を垂らしていた。

「餓鬼……ですか……まさか本当に『餓鬼道』に堕ちてしまうなんて……ふふっ……ふひっ！ははは……あっはははははははははははは！！！！！！！！！！！！！！私にはお似合いかもしれませんね……」

狂気に満ちお溢れた笑い声が響き渡る。

魅琉鬼は一しきり笑った後、口元に手を添えて宣言する。

「さぁ……鬼さん達……お腹が御すきでしょう……？私は此処ですよ……『鬼さん此方♪手の鳴る方へ～♪』」

一斉に飛びかかる餓鬼達。

番傘を開き、ぐるりと一回転して鬼達を刻む。

飛び散った血が傘を汚し、肉片が散らばる。

「本当に満たされませんね……こんなに沢山の血を浴びているのに……これが餓鬼ですか……ックヒ……クク……あっはぁ～！では、もっと沢山切り刻む事にしましょう……私の『飢え』を『渇き』を満たしてくれる方はいるかしら……」

ゆっくりと歩み始める。

飢えた餓鬼達が次々と襲い掛かるが、遍く全てを斬り刻む。

『ばっ……莫迦な……人間の……堕ちたばかりの小娘に……』

肢体を切り落とされた鬼がもぞもぞと胴だけを動かして逃げようとする。

にやりと口を歪ませ嗤った後、脳天に刃を突き刺す。

辺り一面に紅い雨が降り注ぐ。

魅琉鬼は大口を開け舌を出し、血雨を飲む。

「不味い味……酷い臭い……足りない……足りない……まだまだもっと……血を

血を！」

首だけとなった鬼の頭を踏みつぶして歩む。

周りにいる餓鬼達は恐怖に怯え、逃げ惑う。

「『鬼さん此方♪手の鳴る方へ〜♪』」

背後を見せて必死に逃げる鬼の腹に刀を突き刺す。

吹きだす血が漆黒の髪を汚す。

『ひっ！ひぃ！！！！たたた、助けて！助けて！！！』

尻餅を付き、命乞いをする鬼の鼻先に刃を向ける。

「ふふっ……何をそんなに怯えているのです？」

瞳を細め嗤い、見下ろす。

ふと、何かを思いついた様に呟く。

「そうだ……♪斬り殺すのに飽きて来た所なのです……貴方……私と鬼ごっこをして下さらない？十数える内に逃げて下さい……私から逃げ切る事が出来れば貴方の勝ちでございます……」

心底楽しそうな顔をして嗤う。

『わわわ、わかった！！』

慌てて逃げ出す。

「いーち、にーい」

くるりと回ってゆっくりと数え始める。

『じょ、冗談じゃない！！！　頭が逝かれてる！！！　あんな女が堕ちてくるなんて！！！！！』

「くーう……」

汗まみれになって逃げる。

滴り落ちる水滴が鬼の疲労を物語っている。

「――――……じゅう」

一瞬にして背後へ移動し、後頭部に刀を突き刺す。

刀身を握りしめ、じたばたと暴れる。

『――――がっ……がっ』

ぐりっと抉り引き抜く。

「つまらないですね……ヒッ……ヒヒヒッ！はははははは！！あっはははははははは！！！」

＞i27353―33314＜

嗤う。

哂う。

『――――……調子に乗るなよ女』

凄まじい風切り音と共に巨大な棍棒が魅琉鬼に襲い掛かる。

身の丈三メートル。

青い身体に長い牙。

虎ジマ模様の腰布を巻き、額に大きな一角。

銀色の立て髪。

瞳は真っ赤に血走って、眼球は琥珀色をしていた。

『我の初撃を避わすとは――――我が名……』

言い終わる前に顔を真っ二つに斬り裂く。

魚の様に眼の色を変える鬼達。

激情した一匹の鬼が、棍棒をぐるぐると回転させて思い切り地面に叩きつける。

岩盤が大きく揺れ、亀裂が走り、大きな凹を作り出していた

砂塵が巻き起こり、段々と砂煙が薄れて行く。

青鬼が口の端を釣り上げて上げて嗤い、棍棒を自らの肩に担ぐ。

『塵も残っておらぬか……』

満足げにほくそ笑むと、次の瞬間、背筋に凄まじい悪寒が走りぬける。

「何処を見ておいでですか……？」

振りかえる間もなく、斬首された頭部が地面に落ち、轟音と共に地面を揺らす。

首の付け根部分から大量の血が勢いよく吹きだす。

背中を蹴って、飛翔し、何匹もの青鬼の肢体を切り刻む。

『お、己ぇ――――……閻魔大王様直属の我らが鬼兵隊がこのような小娘に……』

屈辱に塗れたその表情を見て、口の端を釣り上げて嗤う。

「修羅の青鬼も大した事はありませんでしたね……『閻魔大王』……貴方様は私の渇きを潤して下さるかしら……？」

ゆらり、ゆらりと歩む鬼。

番傘を差し、血の雨の中、只管歩む鬼の名は『魅琉鬼』

鬼ごっこ（後書き）

次回、閻魔様に喧嘩を売ります。

不安な部分が多々あるので是非ともご感想を！！

イラストは我が親愛なる相方様の物ですｗ

追放（前書き）

今回は親愛なる絵師の相方様とのコラボです。

しっかりと許可を頂いております。

追放

『この腐れアマがー！！』

鬼の咆哮と共に巨大な棍棒が、魅琉鬼目掛けて振りおろされる。

青鬼の憎悪と殺意の籠った一撃を飛翔して回避すると、空中で抜刀して鬼の肩腕を斬り落とす。

どす黒い血が地面にボトボトと落ちる。

既に、両の腕は肘下が無くなっていて地面には夥しい量の血が降り注いでいる。

『ぐっ……あああぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！　俺の腕がぁぁぁぁ！！！』

魅琉鬼は口の端を釣り上げ、邪悪に嗤う。

鬼は膝をついて苦痛に悶え叫ぶ。

「耳障り……」

呟きと同時に首を切り落とすと、血柱を作り出す。

「ヒハハハハハハハッ！　アッハッ！　キヒヒ！……フヒ」

狂気。

正気の沙汰とは思えぬ甲高い声が響き渡る。

魅琉鬼は不気味な狂気に満ち満ちた顔でゆっくりと歩む。

頭の中にあるのは血を浴び、殺戮に酔いしれる事のみ。

自らの『渇き』を潤すため、無限に募る欲求に狂っていた。

ぴたりと歩む足が止まる。

其処にあるのは巨大な『扉』

真っ赤な朱色に金色で『蜘蛛の糸』の絵図が描かれている。

魅琉鬼はにへらと嗤い、その巨大な扉をバラバラに切り刻む。

凄まじい轟音と共に崩れ落ち、砂煙が立ち込める。

広々とした室内には、所々に紅い円柱が立てたれ金の装飾が施されている。

壁は真っ赤に塗装され、至る所に仏像が置かれている。

『本当に来やがったな……』

男の声。

玉座からゆっくりと立ち上がり、何とも厭そうな顔をして欠伸を一つ。

黒い襟付きのシャツに、黄檗色の着物の片側だけに袖を通し、紫色の羽織を肩掛けしている。

黒髪に赤瞳の男。

燃えるような瞳のその男は、魅琉鬼をただ見据える。

＞i２７８２４―３３１４＜

眼と眼が合った瞬間に魅琉鬼が狂ったように嗤う。

「あはは……ははは……あっはははははははは！！　そう……そうですか……貴方様が『闇魔大王』ですか……何て気持ちのいい殺気を放つのでしょう……堪りません……思わず果ててしまいそう……」

男はにやりと嗤い、語り始めた。

「変態が……残念ながら俺はテメェの探してる奴じゃねぇよ……そりゃ俺の『親父』だ。面倒だからって俺にテメェの世話押し付けてフケやがった。人の休日を何だと思ってやがる……くそ親父が」

男は心底憎々しげに喋ると、盛大な溜息を漏らす。

「あら……私が相手ではご不満ですか？　これでも女として恥じる所はないと自負しておりますが……少し傷つきました」

口元に手を添えてわざとらしく泣きまねをする。

「冗談は止せよ。テメェのツラ見れば、全員ビビって小便漏らすだ

ろうよ。一体何人殺せばそうなる？兵隊皆殺しにしやがって……」

「まぁ……せっかく真っ赤に着飾ったのに……お気に召して頂けませんでしたか」

男が腰に差した刀に手を掛ける。

「ああ……気にいらねぇな……！！！！」

二人の距離が一瞬で縮まる。

喉元に突きつけられた二つに刃。

鼻先が擦れ合いそうなほど、近づく二人の顔。

両者の刀はあと数ミリで届く程だった。

「私の接吻を拒むだなんて、酷いお方……女から迫られるのはお嫌いですか……？」

魅琉鬼はぞくりとする様な艶笑と共に耳元で囁く。

「そのまえに首に押し付けようとしてる物騒なもんを何とかするんだな……それに迫る方が好きなんでな……」

「貴方のお相手をする女には同情しますわ」

「そらぁ……どうも」

両者共に後ろへ飛んで距離を取る。

お互いの間合いに入り、緊迫した空気が室内を覆う。

共に刀を内刀して、抜刀の構えを取る。

男は少しだけ腰を屈め、柄より手を離し低く構えてる。

対し、魅琉鬼は柄を逆手に持ち刀身を少しだけ覗かせている。

ほぼ同時に地面を蹴って抜刀。

刀身同士が擦れ合い甲高い金属音を鳴らし、火花を散らす。

魅琉鬼は勢いを殺さぬまま番傘を胴に打ち込もうとするが、刀を垂直に立てて峰部分に手を添えてこれを防ぐ。瞳を見開き、驚くも構わず有りっ丈の力を込めて横へ押しのける。

そのまま壁へと吹き飛び貫通し円柱に強く身体を打ち付け、悶絶する黒髪の男。

体勢を立て直す間もなく、砂煙を吹き飛ばして魅琉鬼が突きを繰り出す。

辛うじて顔面串刺しは免れたが、その首筋からは紅い血が流れる。

「驚きました……私が此処まで闘ったのは貴方が初めて……お名前をお聞かせ出来ないかしら……？」

柱に突き刺さった刀を抜いて妖艶に晒う。

「零≪ゼロ≫」

男は刀を拾って肩に担ぐ。

「とても美しい響きですね……素敵です。益々貴方の血が見たくなりました。」

零は口の端を釣り上げて哂う。

「ハッ……有難くて涙が出そうだ。糞タレめ……ははっ……くくくっ……はっ！　ははははははは！　アッハハハハハハハ！糞アマ……テメェはもう人間霊なんて生温いもんじゃねぇな……阿修羅も裸足で逃げ出す鬼だ……」

＞ｉ２７８２３―３３１４＜

お返しとばかりに突きを繰り出し、肩を射抜く。

突進の勢いは弱まる事を知らず、反対側の壁に激突。

「づッ」

魅琉鬼が手で刀身を掴もうとするが刃を突き刺したまま１８０度回転させ、峰に手を添えて突き上げ抉る。

噴水の様に吹きだした鮮血が零をを汚す。

苦痛に顔を歪ませて刀を振り下ろすが、鼻先寸前でそれを回避して距離を取った零。

「おいおい……心の臓を一突きしたつもりだったんだがなぁ……」

口をにやりとさせる魅琉鬼。

次の瞬間、零の胴体からけたたましい音と共に血が噴き出した。

堪らず、口を押さえると血液が泡となって吐血する。

刀を地面に突き刺して、よろける身体を支えるが膝を付き荒い息を吐き出す。

「ぐぉ……はぁ……はぁ……！！！　テ、テメェ……！！」

「ヒハハハ……流石です……私ももう少しで危ない所でした……」

膝を笑わせながら立ち上がる両者。

お互い最後の力を振り絞り、一撃を加える。

零は魅琉鬼の脇腹に刀を付き刺し、顔面を付き刺そうとした魅琉鬼は虚しくも掌で受け止められ眼前で刃が止まる。

糸が切れた人形の様に、力なく倒れ込む魅琉鬼。

零も壁に凭れかかりズルズルと尻餅を付く。

煙管を袖口から取り出して、煙を吹かす。

「羅毘……！！　見てんだろっ！　出て来い！！」

『イヤだなぁ……兄さん……そんなに怒らないでよ』

ふわり、と降り立ったのは少年。
淡い朱色の髪を肩まで伸ばし、色白の肌に大きな瞳。
額には蒼く鋭い角が生えて口の端に八重歯を覗かせ、にやりと笑う。
白で調律された着流しに、蒼い炎の刺繍が施させ真っ黒な羽織の背には『修羅』の二文字。
「テメェ……人が斬られてるのがそんなに楽しいか？あ？」
「うん！！　すっごく」
間髪入れずに満面の笑みを浮かべて頷く。
「……」
眉をヒク付かせ、歯を食いしばる零。
「殺す」
ドスの利いた声で凄むが羅毘少年はなんのその。
「あ～あ……こんなに斬られて……鯉庵が泣くよ……？」
「るせぇ……早く手当てしろ」
羅毘が溜息を吐き、零の傷口に手を翳すとみるみる内に傷が癒える。

「相変わらず、気味悪いくらい利くな……」

呆れながら言う零であった。

「で、この人どうするの？」

倒れた魅琉鬼を親指で差す。

「あ？　こんな女面倒見切れるか。力封印して人間界に追放だ」

さも当然と言う顔。

「いいの？　父さん物凄く怒りそうだけど……？」

顎に手を当てて首を傾げる羅毘。

「知るかボケ。『此処』に居たらまた暴れだすぞ？こんなイカレ女二度と顔も見たかねぇ」

「まぁそだね。僕の鬼兵隊一人で皆殺しだもの……相手なんかしてたら身が持たないよ」

にぃっと嗤う羅毘。

「顔と言動が一致してねぇよ」

こうして力を封じられ、人間界に追放された魅琉鬼であった。

追放（後書き）

感想お待ちしております

落としまえ（前書き）

無理やりですかねぇ……ご意見下さると嬉しいです。

落としまえ

「――……ふぅ歳には勝てんな……この程度の石段で息が上がってしまうとはのぅ」

真っ黒な着流しに紺色の羽織を羽おって煙管を咥え、石段を登る小さな老人が一人。何処にでも居そうな御隠居であるが、普通の老人と違うのはその頭の長さであろう。古く中国の古典に出て来そうな長い頭に産毛が寂しそうに生えている。

「総大将……あまりご無理はなさらないで下さい……一度引退した身とはいえ、貴方様は良奴一家の大将なのですから」

老人の頭上をパタパタと飛びながら心配そうに見つめる烏が一匹。奇想天外にも程があるが流暢に話す小烏である。

「うっさいわい烏天狗。それよりも早く祠の安全を確かめねばなるめぇよ……この途轍もなくでけぇ妖気……あの女狐かもしれん」

煙管を口から離してふぅ――――っと息を吐く。毒煙をに覆われた烏天狗が苦しそうにごほごほと咳き込む。涙眼になりながらぬらりひょんを睨むも、にかっと歯を見せて笑うだけで悪びれもしない。

突如、顔付きが変わり鋭い眼光で鳥居を見つめるぬらりひょん。その顔は大侠客妖怪の顔であった。その空気を察したのか、烏天狗も顔を上にあげて睨みつける。

「動き出しやがったな……急ぐぞ烏天狗」

地面を蹴り、石段を駆けあがる。木々がざわめき烏たちが怯え一斉に飛び立っている。鳥居の先にある祠から感じる禍々しい妖気。汗が石段にぽたぽたと落ちる。

「総大将！！　この妖気只者ではありません！　御一人では危険です！　本部に連絡を！　馬鹿息子共に伝えます！　それまで今しばらくお待ちを！」

「馬鹿もん！！　こんな奴誰が来たって相手に出来んわ……！　組員を犬死にはさせられん！」

覚悟の篭った声で烏天狗を怒鳴りつける。組員の『親』としての覚悟が垣間見えた。烏天狗の視界が涙で霞む。

石段を登りきったぬらりひょんが、膝に手を置き息を荒々しく吐く。片手で顎に付いた汗を拭い祠を睨むと、小さな女子がぼーっと空を見つめていた。

紅い髪に長い耳。に真紅の帯を締め、美しい椿の花が咲き乱れるように刺繍された黒と赤の着物。少女が気配に気付きゆっくりと後ろを振り返る。

雪の様な柔肌に金色の瞳。何処までも美しく整った顔に艶のある唇。暫くの間ぬらりひょんはその少女に見惚れていた。

「あら……そんなに血相を変えてどうなされたのですか……？」

少女が裾で口元を隠すようにくすりと嗤う。その声で我に返ったぬらりひょんが少女に問いかける。烏天狗は未だにほおけて動かない。

「譲ちゃん……見ねえ顔だな……其処の祠にゃ苔姫って土地神が居たはずだが、知らねぇかい？」

懐に忍ばせているドスに手を掛けながら臨戦態勢のぬらりひょん。少女は瞳を細めてぬらりひょんを見つめた。その瞬間、烏天狗も我に返り、凄まじい殺気に身震えした。

「あぁ……あの小さな御姫様ですか？　お探しの方なら其処に隠れておいでですよ？　何がそんなに怖いのかしら……？　私を見るなりカタカタと震えて隅っこへ逃げてしまいました」

肩を落として落ち込むふりをする。と、障子が控えめに開き、隙間から此方を覗く苔姫の姿が在った。

一先ず土地神の安否を確認し、ほっと胸を撫で下ろす。それを見た少女が、ぬらりひょんにこう尋ねた。

「ねぇ……素敵なおじい様……？　貴方……強い？」

ぞくりとする艶笑と共に、一瞬で眼前へと移動してぬらりひょんの頸を斬りおとしたかのように見えたが、それは黒い影となって消えうせた。少女は瞳を見開き、口を歪めて嗤う。

「烏天狗！！」

気を取られた烏天狗を腕で横に抱えて少女の背後へと移動する。

「馬鹿もんが！！　気を緩めるでないわ」

「面目ない……」

怒鳴られた烏天狗がしゅんとなって謝る。腕の拘束を緩めると頭上へと飛び、構えを取る。

二人のやり取りを見て、くすくすと笑い楽しそうに語りだす。その瞳には狂気が宿り目が合っただけで発狂してしまうほどの恐怖を覚えるだろう。

「やはり力が落ちていますね……以前なら、その不思議な力を発せられる前に頸を落とせていたのですが……残念」

驚愕する二人。隠居した身ではあるとはいえ、ぬらりひょんは嘗て百鬼を率いるまでの大妖怪。その大妖怪が妖怪になりたての幼い少女。しかも、『畏れ』を知らぬ相手にあと一歩で殺されかけたのだ。

ぬらりひょんは、心を静め、瞳を閉じて深呼吸して、ゆっくりと瞼を開き少女を見つめる。

「譲ちゃん……お主一体何もんじゃい？　ワシ相手に『化かし合い』が出来るたぁ……大したタマじゃねぇか……名前……なんてんだい？」

口を歪めて嗤うぬらりひょん。背後には凄まじい闘気が溢れ出て木々をざわつかせ空間を歪ませる。少女は嬉しそうに嗤いこう名乗った。

「……魅琉鬼……それが私の名でございます……妖怪任侠集団奴良組一家初代総大将ぬらりひょん様……以後、お見知り置きを……」

瞳を見開いて驚いた後、大口を開けて嗤うぬらりひょん。腹を抱え

上を向き瞳の端からは涙が溢れていた。

「そうかい……そうかい……こりゃたまげた！　お前さんがあの有名な『椿の鬼姫』かい！！　地獄から蘇ったとは聞いてたが……まさか、女子の姿とはのう……大方閻魔大王に喧嘩でも売って力を封じられたんじゃろう……血気盛んなお転婆譲ちゃんだ」

「あら、嬉しい……私を御存じだなんて……ふふ」

魅琉鬼はぬらりひょんとは対照的に上品に嗤いこう続けた。

「———御無礼お許し下さいまし……久々に起きたものですから……少々興奮してしまいました。貴方様の御噂も地獄まで轟いていらっしゃいますよ……強き者から弱き者まで、その畏れで魅了し護る芯の通った誠の侠客であると……」

煙管に火を付けて、煙を吐き出す。

「そいつぁ嬉しいねぇ……で、魅琉鬼よ……この落としまえどう着ける？　ワシも喧嘩売られた上に部下まで殺されかけたんじゃ……只で帰すってわけにゃいかないねぇ……」

鋭い眼光で魅琉鬼を射抜く。烏天狗には若かりし頃のゆらりひょんの姿が重なって見えた。

「そうですね……今の私では到底敵いませんから……この命、貴方様の物で構いませんよ？　どうせ行くあてもありませんから……好きにして下さいまし」

ふっと寂しげに視線を下ろし笑う魅琉鬼。その瞳には何かを失った

様なそんな悲痛な光が宿っていた。

ぬらりひょんは片目を閉じてにかっと嗤いこう言った。

「お主……孫の嫁にならんか？　お前さん程の女子を殺すのはちと惜しいからの……その眼は生きる目的を亡くした奴の目だ……どうだい？　それならいっそその命、ワシの孫のために使ってみんかい」

此処で慌てて烏天狗が止めに入る。

「そ、総大将……！　貴方はいつも何を考えておいでなのです！　そんな突拍子もない！　本部の幹部連中が黙っておりませんぞ！　二代目の事をお忘れですか！？」

心底うっとおしそうに耳に指で栓をするぬらりひょん。烏天狗の吐く唾が思い切り顔に掛って来た。

「何じゃいうっさいのぉ……人がせっかく恰好良く決めていると言うに……わしゃもう決めたんじゃ……誰が何と言おうとリクオの嫁にする」

ぐぬぬと唸っている烏天狗を余所に此処で魅琉鬼が口を開く。

「……あの……私……生前も殿方と結ばれた事がありませんし、恋も知らぬ生娘で……そんな私にいきなり妻など務まるのでしょうか……？」

頬を赤らめて口元を隠し、視線を逸らして恥ずかしがる魅琉鬼に口論していた二人がきょとんとした顔をする。ぬらりひょんはまたも大口を開き笑ってドスを肩に乗せ、煙りを吹かして口の端を釣り上

げこう言った。

「なぁに心配いらんさ……お前さんならあ奴の支えになれるだろうよ……ほれ行くぞい。若菜さんの飯が待っとる。早くせんか」

「……はい……」

小さく微笑んでぬらりひょんの後ろにとてとてと歩み寄る。その顔は年相応の無邪気で可愛らしい笑顔であった。

落としまえ（後書き）

お爺ちゃんカッコええ……！

ご意見、ご感想、ご指摘お待ちしております

初恋（前書き）

魅琉鬼の視点で書きます。
進まなくてごめんなさい

初恋

「（どうしましょう……胸が騒ぎます……こんな感情初めて……）」

私は、ぬらりひょん様の自室へと案内され此処で座って待っているようにと申しつけられました。室内は広々としていて、畳の香りが私の心をほんの少しだけ落ち着かせてくれます。

辺りを見渡すと、大きな仏壇がありました。其処には一人の美しい女性の遺影と黒髪の大層な伊達男の遺影が並び置かれていました。私は小走りで仏壇の向かい御線香を上げ、鐘を一回鳴らし手を合わせ黙祷します。

丁度、障子の向こう側から声が聞こえて来ました。私の緊張は頂点に達し、どうして良いか分からず気配を絶って姿が見えないように周りの景色と同化し、姿を隠しました。

あぁ……私ったら、いくら緊張したからと言ってそれはないでしょう……。自分の愚かな行動に激しい後悔の念を抱きました。

障子が開かれ、ぬらりひょん様が部屋に入り続いて、私と同じくらいの背丈の童男の方が入って来ました。私はその方の御姿を見た瞬間、ドクンと大きく心の臓が跳ねました。

……え……私、どうしてこんなに胸が熱くなるの？　身体が火照っている……顔も熱い。動悸は激しくなる一方で……。ぬらりひょん様とその方が何か話してはいましたが、私の耳には届く事なく、ただ魅入ってしまいまう……何故？

「魅琉鬼……出て来なさい」

不意に名前を呼ばれ、我に返りぬらりひょん様の隣に降り立ちます。私はリクオ様の顔を見ぬ様そのまま正座して深々と頭を下げ、お辞儀をします。

さぁ……笑うのですよ。私！　今、このお方にこんな表情を見られてはなりません。女らしくこのお方の伴侶に相応しい女の顔をするのです！

私は緊張で硬くなった表情を和らげるよう自分に言い聞かせます。ゆっくりと顔を上げ精一杯可愛らしく笑うよう努めました。

あぁ……固まっておられます。やはり私には無理なのでしょうか……何も答えてくれない……こんなに怖想いをした事はありません……。私は勇気を振り絞って尋ねました。

「私の顔に何か可笑しなものでも付いていますか……？」

不安で堪らない……怖い……怖い……！

すると、リクオ様が顔を真っ赤にしてこう答えてこう答えて下さいました。

「そ、そんな事ないよ！寧ろその逆で……すごく綺麗で見惚れてたんだ……」

照れくさそうに頭の後ろを掻いて笑って下さいました。この時、私は『恋』に堕ちたのだと思います。お母様が仰られていた『恋はする物ではない』という言葉の意味を理解しました。今まで抱いて来

たどんな感情よりも温かくて……優しくて、穏やかな気持ち……大切な大切な私の初恋……

胸から込み上げる熱い気持ち。涙が出るのを必死に堪えて私は笑顔で答えます。

「まぁ……本当ですか？　ありがとうございます……」

私がそう答えるとさらに顔を真っ赤にして俯いてしまいました。照れていらっしゃるのかしら……可愛い人……クスッ。

思わず心の中で笑ってしまいました。ごめんなさい。でも貴方様がそんな顔をするから……許して下さいね。

ふと、視線を横に逸らすとぬらりひょん様が嬉しそうに笑っておられました。

暫くすると、ぬらりひょん様が部屋を出て二人きりになってしまいました。無言の重い空気が流れます。何か話さなくては……無愛想な女だと思われてしまう。そんな事は絶対に避けなければなりません。

勇気を出して声を掛けてみましょう！　リクオ様が息苦しそうにしているではありませんか。

自分を奮い立たせ声を振り絞ります。

「――――……あの……リクオ様……もし……？」

困りました。未だ顔が俯いたままです。気付いていないのかしら……それとも私と話すのが嫌になってしまわれたとか……い、嫌です……そんな事を言われてしまったら私……死にます……そして『あの男』を斬り刻む事にしましょう……フフフ。

――――はっ……そんな事を考えてる暇はありません。もう一度お声を掛けましょう。近くへ行けば気付いて頂けるかもしれません。

私は徐々に顔を近づけて行き……

「リクオ様……リクオ様……」

不意にリクオ様の顔が上がり驚いて尻餅を付かれてしまいました。私ったら、はしたない。もう少しで、接吻してしまうほどに顔を付き付けていたなんて……それよりも御顔が真っ赤です！！　熱があるのかしら！

私は、はしたないと思いつつも着物の袖の端を摘んで、掌をリクオ様の額に触れさせます。やはり……！　そう思って急いで立ち上がり、人を呼ぼうとすると、大きな声で制止させられて我に返ります。私とした事がなんと出過ぎた真似を……そう思っても、もう遅いです。

「は、はい……申し訳御座いません……少し出しゃばり過ぎてしまいました……」

私は泣かずに居られているでしょうか？　顔を見る事が出来ません。

「う、ううん！僕の方こそ大きな声出してごめん……心配してくれたのに……でも、本当に大丈夫だから……」

少し申し訳なさそうに言うリクオ様……優しいお方……良かった……力が抜けて倒れてしまい大層御心配をお掛けしてしまったのか、慌ててしゃがみ込むリクオ様。

……嬉しい……。こんなに心配して下さるなんて。そんな事を思う私は悪い女なのでしょうか？

突然大きな力で引っ張り上げられ、立ち上がれる事が出来ずリクオ様の腕に抱き抱えられました。

「っとと、ご、ごめん！」

……あ……幸せ。私はこれ以上ない幸福感に包まれます。リクオ様、素敵。私は自然と微笑んで答えました。

「いえ……有難う御座います……」

またも顔を紅く染め上げて私を見つめるリクオ様。そのまま手を引かれ部屋を出ました。

「（お母様……私……素敵なお方に恋しましたよ……）」

初恋（後書き）

如何だったでしょう？
心理描写頑張ったつもりw
感想お待ちしてます。

宝物（前書き）

マジで感想お願いします。
いろいろと不安

宝物

「――――でね！　お爺ちゃんとラーメン食べた後、お勘定払わずに店を出ても誰も気付かなかったんだよ」

リクオ様は得意げにぬらりひょん様との思い出話を語って下さいました。今もこうして手を引き、明るい笑顔で私を楽しませようと気遣って頂いております。本当にお優しい方……私には勿体ないほどの殿方でございます。

「まぁ……リクオ様ったら」

楽しい……心からそう思えます。こんな気持ちになるのは何年ぶりでございましょう……時を忘れいつまでもこうしていたいと願ってしまいます。やはり私は欲深な女ですね……。

「あ……ごめんね、僕ばっかり話しちゃって……」

私の顔を見て頬を赤らめて頭の後ろを指で掻くリクオ様。いいえ……謝るのは私の方ですよ？気遣っているのが分かっていながら貴方様の優しさに甘えて居るのですから。

「……いいえ、とても楽しゅうございますよ？　もっとお話しお聞かせ下さいな……リクオ様」

一層照れて御顔を真っ赤にされるリクオ様……可愛い人。私も自分の顔が熱くなるのが分かります……けれど、嫌な感じは一切しなくて……胸の奥が温かくなる。もっとこのお方とお話がしたい……私の欲は時を増す事に深くなって行きました。

ふと、何かを思いついたように私に笑いかけて下さるリクオ様。夕日も手伝ってその笑顔は眩しく輝いておられました。私の心臓は大きく跳ねて、呼吸をすることも忘れ魅入っていました。

「そうだ……！　ねぇ、魅琉鬼ちゃん！　今日はこの先の神社で夏祭りがあるんだ！　このまま一緒にいかない？　ちょっと待ってね……烏天狗。居るんでしょ？　母さんに伝えてよ」

突如、気まずそうな顔をしながらあの小烏が私たちの頭上に姿を現します。フフ……そんなに怯えずとも良いでしょう？　取って食ったりなどしませんよ……？　邪魔をしなければ……ね……。

「はっ……申し訳ございません」

空を飛びながら傅く烏。リクオ様は大きく溜息を漏らして、苦笑いをしてこう仰いました。

「いいよ……どうせ、爺ちゃん辺りに様子を見て来るように頼まれたんだろ？　烏天狗は悪くないよ」

「ありがとうございます……若」

改めてお辞儀をした烏が片目を開けて此方を伺います。私は気分が悪くなりかるく睨みつけてやると恐怖で顔を顰めておりました。私は吹きだしそうになるのを必死に堪え、口元を袖で隠します。会釈をすると私の間合いから即座に身を引き姿を消します。烏天狗ともあろうお方が……何とも滑稽ですね。

二人で神社の石段をゆっくりと登って行きます。私の手を握るリクオ様……私を気遣ってか、『休憩しようか？』と仰って下さいましたが、大丈夫ですと断ってしまいました。失敗です。きっと私よりもリクオ様の方がお疲れなはず……嘘でも休憩したいと言うべきでした。

男の子子の意地なのか、慌てたように笑うリクオ様。とても可愛らしくて……いけない……此処で笑ってはリクオ様に恥をかかせてしまう……。

鳥居をくぐり抜けると、私の見た事のない光景が目の前に広がります。提灯の優しい灯り……賑やかで、楽しげな祭囃子の音。人は溢

れかえり満面の笑みで行き交って行きます。私は思わず声を漏らしてしまうと、リクオ様がこちらを振り向き『祭りは初めてか』と御尋ねになりました。

私は、無性に恥ずかしくなり顔を背けて告白すると……

「きょ、きょ！今日は僕が美味しい物とか楽しい事とか一杯教えてあげるよ！！！」

少々上ずった声でそう仰ってくれました。

嬉しい……。

それからは二人一緒にはしゃぐ様に駆けまわりました。出店は組の構成員がほとんどなのか皆、笑顔でリクオ様の来店を喜びます。私と一緒に大きな綿菓子を食べようと言って下さり、これでもかと言う大きさの物を渡され、瞳を輝かせて私に向かってにかっと嬉しそうに笑顔を浮かべていらっしゃいます。私も釣られる様に笑いました。

本当にいろいろなお店へ私を案内して下さり、楽しそうにはしゃぐリクオ様。私は、食べ物の味やどんな遊びよりもリクオ様に惹かれ、夢中になって行きます。

「……あ、そうだ……魅琉鬼ちゃん！　ちょっと待っててね！」

私は、手を離すのが嫌で握る手に力を入れてしまいました。い、嫌だわ……恥ずかしい……でも、離したくない……。

「……何処へ……私が付いて行っては、ご迷惑ですか」

>i29831―33314<

自分でも泣きそうになっているのが分かります。なんて恥をさらして居るのでしょう……自分に呆れてしまいます。

「だ、大丈夫だよ……すぐ其処だから！　ね？　此処で待ってて」

真っ赤になってたじろぎ私を宥めて下さいます。ごめんなさい……リクオ様。

「本当に直ぐですか……？」

あぁ……なんて愚かなんでしょう……リクオ様を疑ってしまうなんて……。余程可笑しかったのか、微笑んで私と指きりをして下さいました。胸に渦巻いていた不安が一気に吹き飛んで行くのが分かります。本当に駆け足で戻って来て下さり、息を切らせて両膝に手を付いて『言ったでしょ？』と片目を閉じて笑って見せて下さいます。

なんて幸せなのでしょう……？　嬉しくて泣きだしそうです。でも泣いてしまったら約束を守って下さったリクオ様に申し訳が立ちません。堪えるのです。私！！！

リクオ様が何やら落ち着かぬ様子で私の顔を伺っておいでです。私ったら何か粗相をしてしまったのかしら……そうだったのなら……死んでお詫びします……いいえ！　ただ死ぬなんて生温いですね……。

「あ、あの……これっ！君に似合うと思って！！！」

そういって、私の目の前に腕を付き出すリクオ様。身体は震え顔は俯いて両目を硬く閉じたままゆっくりと拳を開くと、何とも可愛らしい簪が掌の上にありました。

え……まさか、これを私に……あぁ……あぁ……泣かないって決めたのに……また困らせてしまうではありませんか……

案の定、慌てて私を慰めて下さいます。違うのです。これは嬉し涙なのですよ……？　だから貴方様がそんな顔をする必要はないのです。

私は泣き笑いながら、リクオ様に誓いを立てます……。

「お慕い申し上げます……この魅琉鬼……命尽きるまで、貴方様のお傍に……」

この日私は、この世で最も大切な宝物を手に入れました。

宝物（後書き）

はーい。また魅琉鬼視点で申し訳ございません！
次こそはガゴゼ行きたいなぁ？

覚悟（前書き）

ガゴゼまで行けなかった……
感想、ご指摘アドバイスお願いします

覚悟

「――――クオ様……リクオ様……起きて下さいまし……」

魅琉鬼が布団をかぶって横に寝そべるリクオの肩を揺すりながら名を呼んでいる。その表情はなんともにこやかで優しい眼差しをしていた。

リクオは寝返りを打って目を擦りながらゆっくりと瞼を開きまどろむ意識を覚醒させて行く。突如掛け布団を勢いよく捲り上げ、驚きの声と共に後ずさった。

「わっ！　魅、魅琉鬼ちゃん！？　どうして此処に！？」

慌てふためくリクオの態度に瞳を大きく見開いた後口元へ手を添えてくすくすと微笑んだ。対し、リクオは長襦袢の右肩を半分以上ずり下ろさせて、口をぽかんと開け魅琉鬼を見つめる。

「朝食の準備が整いましたので、リクオ様を起こすよう若菜様から仰せつかりました。驚かせてしまったようで……申し訳ございません」

視線を落とし、落ち込む魅琉鬼の姿に思わず見とれてしまうリクオ。その憂いな表情は見る者を吸いこむような、美しく儚げな顔だった。長い髪を後ろで団子状にして、リクオが贈った白椿の簪を挿している。袖は紅い襷で捲くられている事から察するに魅琉鬼自身も朝食の準備を手伝ったのだろう。

「あの……それ……似合ってるね」

リクオは何が恥ずかしいのか、顔を赤らめて簪を指さし蚊の鳴くような声で言った。魅琉鬼は幸せそうに瞳を細めて、片手で簪に触れ礼を言う。

「有難う御座います……とても嬉しいですわ……貴方様にそう言って頂けて」

「う、うん！　僕も気にいってくれて安心したよ」

笑いながら照れくさそうに頭の後ろを掻くリクオ。魅琉鬼もつられて上品に笑う。と、此処で若菜の大きな声が室内に響く。すると袿にさっと手を通して立ち上がり、慌てて台所へ向かう。襖の戸を閉める際、後ろを振り返り『早く来て下さいね』と笑って出て行った。

暫く、呆けて襖の向こう側を見つめる。すると、背後からぬらりひょんが声を掛けて来た。

「なぁにを朝から鼻の下を伸ばしとるんっじゃい……早くしたくせんかい。ほれ、そこにあ奴が用意した服がある。早くせんとワシがお前さんの分を食ってしまうぞ」

肩をびくっと跳ねらせ驚くリクオ。その様を見たぬらりひょんが大口を開けてげらげらと笑っている。流石のリクオも頭に来たのか、大声で怒鳴りつけて睨む。

「爺ちゃん！！　いつから其処に居たのさ！　それに鼻の下何か伸ばしてないやい」

「そうかのぉ〜。ワシにはこぉんなに伸びて見えたぞ」

わざとらしい仕草で鼻の下を伸ばすぬらりひょん。リクオがムキになって反撃しようとすると、ひょいっと後ろへ飛んでイヤらしい笑を浮かべ、部屋を出ていった。

長い木製の机に妖怪たちが群がっている。朝食のオカズをめぐって小妖怪達が小競り合いを始める。其処へつららが雪化粧で妖怪たちを凍らせて一件落着。巻き添えが何人か出たがそれも愛嬌である。

賑やかな食卓。リクオの隣に正座して、茶碗にご飯をよそい上品に

置く魅琉鬼。リクオは素直にありがとうと言って微笑むと頬を赤らめてしまう魅琉鬼。視線を逸らして小さな声で呟いた。

「……いえ、このくらいの事は……」

「今朝はね、リクオの分は私が作りたいって言って魅琉鬼ちゃんが作ってくれたのよ」

嬉しそうに微笑若菜。自分に娘が出来たようだと大喜びしていたそうだ。恥ずかしそうに口元を隠しながら遠慮がちに魅琉鬼が口を開いた。

「その……夫婦になるわけですし……少しでもリクオ様の味の好みが知りたくて……勝手なことをしてすみませんでした……お口にあいませんか？」

茹で蛸のように顔を赤くするリクオ。周りの妖怪達は呆気に取られてつららは悔しそうに布を噛み、魅琉鬼を睨む。それを見た魅琉鬼が余裕の笑みで応えた。

「（キィー！！　ポッ出の女のくせしてぇ！　私なんか若のオムツだって変えた事あるんだからぁ！！）」

つららの周辺に凄まじい冷気が漂う。周りの妖怪たちは悉く氷漬けにされるのであった。

そんな中、味噌汁を啜りながら睨む妖怪が一人。黒い長髪で笠帽子を被り、僧侶の格好をした伊達男。奴良組特攻隊長の一人黒田坊である。

「（拙僧の記憶が正しければ……あの女……）」

魅琉鬼の異常さに気付いて居たのは黒田坊だけではない。首無しも青田坊も奴良組一家の兵で有れば、誰もが警戒し魅琉鬼を恐れて居た。全員が魅琉鬼間合いには入らず、決して触れようとはしなかった。

朝食が済み、登校の準備を整え玄関先で靴を履くリクオ。やがて立ち上がり後ろを振りかえって魅琉鬼に告げる。

「じゃ行ってくるね。魅琉鬼ちゃん！　帰ったらまた一緒に遊ぼうね」

「はい……リクオ様もお気を付けていってらっしゃいませ……私もリクオ様が帰って来るのを心待ちしております……」

恭しくお辞儀をして朗らかに微笑む。リクオは玄関の戸を開け手を振り学校へと向かって行った。

「行ったか……」

ぬらりひょんが両手を袖の中へ通しながらゆっくりと歩み寄って来る。爪楊枝を歯で咥えながら片目を閉じてこう言った。

「魅琉鬼……ワシの部屋へ来なさい……ちとお前さんに話がある。今後の事についてじゃ」

「はい……畏まりました。ぬらりひょん様」

障子から眩い太陽の光が差し込む。座布団の上に正座し茶を啜りな

がら唐突に言った。

「今夜の寄り合いで正式にリクオを三代目として継がせる事を幹部連に伝える。其処でお前さんとリクオの婚約も告げるつもりじゃ……お前さんにはこれからリクオと同じ学校へ行ってもらう。あ奴は妖怪としての覚醒は未だしておらん。組の中には決して納得しない者も出て来るはず……リクオの命を狙う者も居よう」

その言葉を聞いた瞬間、凄まじい勢いで畏を発する魅琉鬼。ぬらりひょんの額には汗が滲み、片目を閉じて苦笑いをする。

「落ち着かんか……仮定の話じゃ……お前さんが居れば万に一つ……億に一つもありゃしねぇだろ……ワシはあ奴まで失う訳にはいかん……」

魅琉鬼の瞳に炎が灯る。その瞳には覚悟が宿っていた。徐に口を開きぬらりひょんにこう告げた。

「ええ……承知しております……その様な不逞の輩が居た際は……死よりも深い恐怖を味あわせて差し上げます。輪廻転生をも拒みたくなるほどの……ね……」

＞i30238―33314＜

ぬらりひょんの背筋にゾクリと悪寒が走る。何処までも妖しく妖艶な魅琉鬼の瞳に武者震いした。屋敷中の妖怪達が怯え警戒した。

「宜しく頼んだぞ……魅琉鬼」

覚悟（後書き）

ガゴゼさん可哀そう……そしてつららちゃんのファンの方申し訳ないです。原作３人娘に入るすきを全く与えない魅琉鬼ちゃん……ごめんなさい

願い（前書き）

あー……落ちが……

願い

『――――……こんな奴らと一緒に居たらもっと人間に嫌われちゃうよ！』

リクオの怒号が大広間から漏れ出す。勢い良く障子の戸が開き、部屋を飛び出して行く。ぬらりひょんは苦虫を噛み潰したような顔をして顎を撫でる。

「どうしたんじゃ……リクオの奴」

考え込むぬらりひょんの背後から野太い男の声が聞こえて来た。格式高い僧侶の格好をし、鼻の下に立派な黒髭を蓄えるこの男は良奴組相談役の木魚達磨。

木魚達磨が厳しい瞳でぬらりひょんを睨みつけてこう言い放った。

「――――……失礼ながら、リクオ様とは本当に血が御繋がりか？姿かたちは元より考え方まで人間よりだ……」

木魚達磨は溜息を吐き、下を向いてやれやれと首を振る。ぬらりひょんが後ろを振り返り、凄味を利かせた表情で歯を食いしばる。

「あーん……どういう意味じゃい達磨……いくらお前さんでも、ちと図に乗り過ぎじゃないかい？」

大広間の空気が凍る。達磨はたじろぎ額に脂汗を滲ませた。此処で沈黙を破ったのは神隠しを得意とする『ガゴゼ』。口が大きく裂け、肌は薄緑色。大きく裂けた口からは黄ばんだ鋭い牙が顔を見せてい

た。

『どうやら若は遊びたい盛りの様ですな……三代目の件、今一度検討された方がよろしいかと……』

にたりと笑うガゴゼ。余程自信があるのか確信めいた瞳でぬらりひょんを見つめる。当のぬらりひょんは、落胆のため息を吐き、どさりと胡坐を掻いて座った。煙管に火を付けて煙を吐き出し、両膝をパンっと叩いて仕切り直す。

「――――……ふぅ。まぁリクオは何とかなるじゃろ……予定とは狂ったが、いいじゃろう……魅琉鬼。入りなさい」

皆が顔を突き合わせるさなか、ふわり、とぬらりひょんの隣に腰を下ろす魅琉鬼。皆の顔付きが変わり、畏れを発する。中にはカタカタ身体を震わせ涙ぐむ妖怪までいた。

「紹介しよう……リクオの正式な許嫁として本家に置く事にした、魅琉鬼じゃ……まぁ皆も知っているとは思うがの。一応な……」

そういって嗤うぬらりひょん。皆の驚いた顔に満足が行ったのか顎を撫でている。魅琉鬼は恭しくお辞儀をして、凛とした声で名乗る。

「お初にお目に掛ります……奴良組幹部の皆々様……この度、良奴組一家次期大将、奴良リクオ様との婚約を結ばせて頂きました魅琉鬼と申します。不出来な女ですが、リクオ様に相応しい、良き妻になれるよう粉骨砕身努力致しますので、どうぞお見知り置きの程を」

魅琉鬼が顔を上げにこりと微笑むのと同時に木魚達磨が勢いよく立ちあがり怒鳴りつけた。周りの幹部連中もどよめき始める。

「総大将……一体何をお考えなのですか！！　リクオ様に続き『椿の鬼姫』とは……貴方は組を潰す気か！？　魅琉鬼とは名の通り『琉（王を目指す者）』を魅了する鬼の事……誑かし、惑わし、誘惑し、籠絡する……このような女が伴侶だと！？　お戯れが過ぎますぞ」

達磨の発言に周りの妖したちも同調する。暫く黙っていたぬらりひょんが煙管を叩きつけ一喝し、広間を静寂が包む。ゆっくりと瞼を開き、にやりと嗤い言い放った。

「魑魅魍魎の主になるんじゃ……これくらいの女の手綱を握れにゃ話にならんじゃろ……フハハ」

魅琉鬼も釣られ、袖で口元を隠し上品に嗤う。妖怪達は震える身体を抑え、押し黙っていた。

「リクオ様……魅琉鬼です……お邪魔しても宜しいですか？」

日も沈んで辺りに不気味さが漂う。梟の鳴き声や虫達が騒ぎだす頃。リクオの部屋の前で正座し、返答を待つ魅琉鬼の姿があった。

「魅琉鬼ちゃん……うん……大丈夫だよ」

控えめに障子を開け、お辞儀をして部屋に入る。既に蒲団が敷かれており長襦袢を着ているリクオ。魅琉鬼はリクオの正面に正座して、少し緊張した様子で胸の襟を掴みリクオに問いかけた。

「おじい様から聞きました……寄り合いの途中、部屋を飛び出されたと……リクオ様は……私達妖怪が嫌いになられたのですか……？」

魅琉鬼の拳がふるふると震える。瞳は潤って今にも泣きそうな表情をしていた。リクオは困った表情をしながら口を開く。

「僕は……妖怪がカッコいい物だって思ってたんだ……何より爺ちゃんが屋敷の皆から慕われてて、昔の話を聞く度に僕もそうなりたいと思ってった……でも、学校で爺ちゃんの事馬鹿にされて……寄り合いでは皆が人間に迷惑掛けるような事ばかりしよう。驚かせようって話し合ってた……僕は情けなかったんだ……カッコいいと思ってた妖怪達が……コソコソセコイ事ばかりやってて……」

リクオは硬く瞳を閉じて拳を握る。手の甲にはぽたぽたと涙が零れ落ち、歯を食いしばる。すると、ふわりと何かに包まれた後、身体が強い力で引き寄せられた。鼻を甘い香りが刺激する。顔を上げると、美しく笑う魅琉鬼の顔があった。

「そうだったのですね……リクオ様……貴方はどうなりたいのですか？　リクオ様がなりたい者とはどのような人でございますか……？」

リクオは声を震わせて答える。

「僕は……」

「はい……」

「僕は……『良い人間』になりたい……」

魅琉鬼は瞳を閉じてリクオの後ろ頭を優しく撫でる。

「はい……」

「人間に迷惑を掛けない『立派な人間』なりたい」

「はい……素敵でございますね……リクオ様」

リクオは瞳を見開いて驚き、魅琉鬼を見つめる。魅琉鬼は頭を傾けて微笑んだ。

「魅琉鬼ちゃんは可笑しいと思はないの？　僕は爺ちゃんの孫で……妖怪の血が入ってるのに」

俯き加減のリクオの頭を撫でながら、優しい声で語りだす。

「そんな事思うはずがございません……私は『リクオ様』を心よりお慕いしております……人間だろうと妖怪だろうと関係ありません……貴方様は私に大切なものを下さいました。私に幸せを与えて下さいました……貴方様が目指すのであれば、全力でお支えします。私は、どんなリクオ様でも御側に居たい……そう願っております」

「そっか……」

「……はい」

そのままリクオは魅琉鬼の胸の中で眠りに落ちた。

願い（後書き）

もうね……引っ張ってマジでさーせん……次こそは……次こそはガゴゼさんに天に召されて頂きます。

出入（前書き）

何とか終わったｗｗ

出入

台所から食器の割れた音が聞こえて来た。魅琉鬼は震えながらテレビの液晶画面を見つめる。それもそのはず、リクオが下校のため乗車するはずのバスがトンネル付近で崩落に巻き込まれ、『生き埋め』になったとニュース速報で伝えられたからである。

「――――……そんな」

不意に零れた呟き。魅琉鬼は全身を震わせて眉を顰め、今にも泣きそうな顔をしている。この上ない絶望感が胸の内を支配し、糸が切れた人形の様にその場で崩れ顔を俯かせて両手で覆い指の隙間から涙が零れ落ちた。

「あっ！　帰って来られた！」

つららの言葉を聞き、顔を上げすぐさま下駄を履いて外へ出る魅琉鬼。空を見上げると烏天狗にランドセルを掴まれ、空中を浮遊するリクオの姿が瞳に映った。

「わ――――……」

「リクオ様！！！！！」

地面に降り立ったリクオに魅琉鬼が勢いよくしがみ付いた。顔をくしゃくしゃにしながらぼろぼろと涙を流す魅琉鬼。リクオは訳も分からず、瞳を見開いて抱きとめ背中をさする。

「良かった！　……良かった！　御無事で……ぐずっ……ひっく」

駆け寄った青田坊や首無し達が呆然と口を開けており、つららは悔しそうに地面を踏んでいた。落ち着きを取り戻したのか、リクオの身体から離れて顔を真っ赤にしながら俯いてしまう魅琉鬼。頭の上から水蒸気が見えそうなほどの羞恥心が魅琉鬼を襲った。

「も、申し訳ございません……はしたない所をお見せしてしまいました……」

リクオも釣られてか、顔を紅くし俯いて押し黙ってしまった。何とも桃色な空気に嫌気がさしたのかつららが大きく咳払いをして、二人を現実世界へ引き戻す。リクオは苦笑して頭を掻き、何もなかったように取り繕った。

「おう。帰ったか……しかし、お前悪運強いのぉ」

座布団の上で、呑気に茶を啜りながらしみじみと言うぬらりひょん。リクオは首を傾げた後、驚いた顔をしてテレビの前へと駆け寄った。信じられないと言う顔付きで、画面を見つめ、額から汗を流し唾を飲み込む。

「な、何だよこれ！！」

叫ぶと同時に魅琉鬼が用意した羽織を乱暴に受け取り、庭へ飛び出て周りの妖怪達に大声で声を掛ける。慌てて現場へと急ごうとするリクオ達。魅琉鬼も番傘を手にリクオに続く。

しかし、これを木魚達磨が一括し引きとめ問いただした。

「待ちなされ！　一体何処へ行くおつもりですか？　まさかとは思

うが人間どもを助けに行くなどという御つもりか？」

鋭い眼光でリクオを射抜く。リクオも負けじと睨みつけこう言い放った。

「当たり前だ！！！」

「なりませぬぞ！　人間を助けに行くなど言語道断。その様な考えで我々百鬼を率いる事が出来ると思いか」

人差し指でリクオをビシリと差して、怒鳴り付けこう続けた。

「我々は妖怪の総本山『奴良組』なのだぞ！　人間の気まぐれで百鬼を率いられて堪るか！！！」

次の瞬間、木魚達磨の背中に凄まじい殺気と何かを押し付けられた感覚を覚える。全身が金縛りにあったかのように動かず、顔中汗塗れになり、呼吸困難に陥ったかの様。後ろを振り返る事も出来ず、只立ちつくすのみ。

「お黙りなさい……木魚達磨……貴方は誰に向かってその様な物言いで怒鳴りつけていらっしゃるのかしら……分を弁えるという言葉を御存じありませんか？……その頸、余程私に飛ばされたいようですね」

魅琉鬼が怒りをあらわにして、仕込刀の柄を押し付ける。少しだけ刀身を覗かせ銀色の妖しい光が夜空に映える。その場に居合わせた妖怪達は震えあがり、声を出す事も出来ずにいた。木魚達磨が締め上げられたような喉から必死に声を出した。

「何をする……私は……――――」

「黙れ……その口を閉じなさい……」

木魚達磨の言葉を遮り、畏を増幅させ捩じ伏せる。すると、今まで静観していたリクオが大声を上げた。

「――――……やめねぇか！！　魅琉鬼！！！！！！」

リクオの言葉に身体をびくんっと跳ねらせて、リクオを見つめる。その表情は恍惚として熱い吐息と視線を送っていて何とも艶やかな雰囲気を纏っていた。辺りの温度が急激に下がり、白い煙が立ち込め、短かったリクオの髪が見事な白く美しい髪に変色していった。

「（濡れてしまいそう……リクオ様……なんて立派な御姿……それに初めて呼び捨てで……）」

白い髪が風に靡く。枝垂れ桜の花弁が舞い、辺りを静寂が包む。リクオはゆっくりと口を開き、木魚達磨にこういい放った。

「時間がねぇんだよ……てめぇの御託なんざどうでもいい……木魚達磨。俺が『人間だから』妖怪を率いちゃいけねぇってんなら人間なんて止めてやらぁ……」

大気が揺れる。羽織がゆらゆらと揺れ、リクオが呟いた。

「今夜は何だか血が熱いなぁ……」

烏天狗がリクオの膝元で傅き告げた。

「リクオ様……それが妖怪の血です……貴方は私達を率いて良いのですよ」

リクオが口の端を釣り上げ嗤い、長ドスを肩に担ぎ後ろへと振り返った。魅琉鬼の心臓は張り裂けるほどの脈打ち顔を赤らめて、ただ漫然と見つめる。惚けている魅琉鬼にリクオが言った。

「来いよ。魅琉鬼……俺が魑魅魍魎の主になるのを一番近くで見せてやる。俺の隣に立っていいのはお前だけだ……特等席だぜ？」

つららが口をあんぐりと開け惚けている。黒田坊や首無しも呆気にとられ固まっていた。

魅琉鬼はこれまでに見せた事のない嬉しそうな顔をしてリクオの元へと駆け寄った。

人々の悲鳴や喧騒がトンネル前で飛び交う。トンネルの入り口は巨大な岩が積もって完全に塞がれていた。一人の母親が警官の胸倉を掴み我が子を助けてと泣き叫ぶ。それは正に阿鼻叫喚。大勢の保護者達が悲痛の声を上げていた。

小さな男の子が母親の服の裾をひっぱり、何かを指ながら呼んでいた。反対側の瓦礫から小さな赤鬼が顔を出しすとぞろぞろと姿を現し、トンネルへと向かって行った。

子供たちの悲鳴が薄暗いトンネル内に響き渡る。怪我をしている生徒を必死で励ます少女が一人。茶色の髪を肩まで伸ばし、頭の横で髪を纏めてる彼女は家長カナ。リクオの幼馴染で何かと世話好きな女子生徒である。

懐中電灯を片手に辺りを見ているのは、リクオの同級生である清継と島。妖怪の存在を否定し、ぬらりひょんを馬鹿にしたのもこの二人だった。

島がフードを被った不気味な妖怪を見つけ、小さな悲鳴を上げる。ガゴゼの号令と共に一斉に事も達へと襲い掛かる。

次の瞬間、反対側の瓦礫を突き破り、百鬼夜行が姿を見せ、リクオがガゴゼを睨みつける。百足妖怪の頭上に乗り、その隣には魅琉鬼の姿があった。ぴっとりとリクオの胸に寄り添い一つの羽織を二人で羽織っていた。

＞i30237｜33314＜

「ガゴゼ……貴様が何故ここにいる」

ガゴゼを見下ろし、ドスの利いた声で問いただす。リクオは羽織を掴んですとんと地面に降り立ち、魅琉鬼もそれに続く。

リクオの問いに悪びれもせず、こう答えた。

『ワシはいつも通り子供を襲って居ただけだが……』

口を歪めて笑い見下した目でリクオを睨みつける。

「それが本当だとしたら……テメェは本当に小さい妖怪だぜ……弱いもんを殺して悦に浸るなんざ底が知れる」

逆上したガゴゼ会の妖怪達がリクオに襲い掛かる。手がリクオへと伸びきる前に妖怪の身体が真っ二つに裂けて、けたたましい音と共に血潮が吹き荒れる。飛んできた返り血を番傘で受け止め、ガゴゼを睨む魅琉鬼。

「三下が……リクオ様に牙をむく？　あっははは……嗤わせないで下さるかしら？　その様な考えを目論む事自体が罪……さぁ……産まれた事を悔いなさい……痛みも、苦痛も、存分に味合わせて差し上げましょう」

簪を抜き取り、団子状だった髪が解けさらりと落ちる。帯に簪を挿し、雑魚妖怪を一気に斬り刻んだ。血が吹き出る音が暗闇に響き、金色の瞳が妖しく揺れる。

血のこびり付いた刀を振り下ろすと、勢い良く血飛沫が飛び散り地面を汚して行った。

つららの吐息で妖怪達は氷漬けにされ、首無しが自慢の糸で締め上げる。青田坊はその怪力で敵を捻り潰し、黒田坊は暗器で次々と殲滅していく。

自棄になり子供達を人質に取ったガゴゼの前に突如姿を現したリクオ。顔を斬りつけてたじろぐガゴゼにこう言い放った。

「子供を喰い殺す妖怪……そりゃ恐ろしいさ……けどな、そんな妖怪が闇の世界で一番になれるはずがねぇんだよ……情けねぇなぁ。こんなんばっかが俺の僕妖怪かよ。だったら俺が三代目になってやらぁ」

高らかな宣言と共にガゴゼを斬り捨てるた。

「あぁ……リクオ様……」

魅琉鬼は歓喜の溜息を漏らす。吐く吐息には熱が篭り、上気した肌は何処までも艶やかで妖艶だった。

「どうだい？　惚れ直したかよ魅琉鬼」

リクオは刀身についた血を和紙でふき取り、放り投げた。魅琉鬼は駆け足でリクオの元へ行き背中に頭をくっ付けて幸せそうに微笑んだ。

出入（後書き）

ちょっと物足りない感がある可能性が……すいません
感想お待ちしてます

妖花（前書き）

皆さんお忘れかもしれませんが、魅琉鬼は……痴女です

妖花

障子から眩しい陽の光が差し込む。心地よい小鳥の囀りが耳に届く。良く整頓された和室。畳貼りの広々とした一室でこの部屋の主、奴良リクオがスヤスヤと寝息を立てていた。

「――――……んっ……むぅ……（ぶにゅ）」

リクオが寝返りを打つと、何やら途轍もなく柔らかな物体がリクオの頭を包み込んだ。息苦しくなり頭を左右に振って？いても一向に抜けだす事が出来ない。それどころか、強い力で頭を押さえつけられて、益々息苦しさが増して行った。

「（く、苦しい……！！　でも何だろう甘い臭いがする……何だか落ち着くな……ってそうじゃなくて……！！　一体どうなってんだ）」

「あんっ」

突如矯声が聞こえ、リクオは耳を疑った。強引に頭を引き剥がし見上げると、驚くほど妖艶に笑う魅琉鬼の顔が目の前にあった。艶のある薄桃色の唇に白い首筋。長襦袢から覗く鎖骨が酷く艶めかしい。

「――――……おはようございます。リクオ様……」

魅琉鬼は瞳を細め、幸せそうに微笑む。しっかりと両の腕でリクオを抱きしめて離そうとしない。頬は上気して少し恥じらった顔をしていた。

「み、魅琉鬼！　どどどど、どうして僕の部屋に！　もう子供じゃないんだから一緒に寝てたらまずいよ！」

リクオは焦り、顔を真っ赤にしながら魅琉鬼を説教する。魅琉鬼がゆっくりと身体を起こすと、肩から長襦袢がズレ落ちる。大きく開いた胸元からは、たわわに実った果実が顔を覗かせる。紅い髪が陽の光に照らされ、燃える様に輝いていた。

＞ｉ３０１９３―３３１４＜

「ウフ……子供ではない……だからこそではありませんか……リクオ様ももう十と二つ……私ももう十五になりましたわ……そろそろよろしいのではございませんか？」

ゆっくりとリクオに擦り寄り、鼻先が付きそうになるまで顔を近づけて艶笑した。リクオは思わずたじろぎ、恐る恐る口を開く。

「……いいって……何が？」

「女の口から言わせたいのですか……？　少々野暮ではありませんこと？」

リクオは肩をびくんと跳ねらせて、顔に汗を滲ませる。魅琉鬼はくすりと嗤い、リクオの首筋に舌を這わせた。驚いたリクオは小さな悲鳴を上げる。またも妖艶な貌をして唇で肌を吸い立てた。滑った感触がリクオを襲う。成す術のなく魅琉鬼に押し倒され、上から下へ舐め上げられる。

「ちょっ……魅琉鬼！　ホントに不味いよこんな事……ひゃ」

「何が不味いのですか？　私達は将来を誓い合った身……それに夫の欲求を解消するのは妻の務めです。さぁ……力を抜いて……私に身を委ねてくださいまし……」

そう言って、垂れ下がった髪を指で耳に掛けて、愛撫を再開する。水音が室内に響き、魅琉鬼の舌べらが臍に到達しかけたその時、襖が開く音がした。

「若〜そろそろ起きてくだ……きゃぁぁぁぁぁぁ！！！！！　ななななな、何をしておられるのですか！　御二人とも！　あ、あ、あ、朝からそんな破廉恥な」

つららの悲鳴が屋敷中に響き渡る。顔を茹でダコにして顔を覆うが、指の隙間からしっかりとリクオの肢体を覗き見ていた。魅琉鬼は大きく溜息を漏らして立ち上がり、乱れた衣服を整え後ろへ振り返ってつららに言った。

「つららさん……出歯亀は悪趣味ですよ？　営みを邪魔するだなんて……リクオ様、朝食の支度をして参りますので、失礼いたします」

「あ、うん……」

くすりと微笑みリクオの部屋を出えて行った。残された二人はただ漫然と惚けるだけ。つららは心此処にあらずと言った状態で暫く固まっていた。

「おはようございます……若菜様……遅れてしまい申し訳ございませんでした」

魅琉鬼が申し訳なさそうに謝罪をするとにこりと笑って明るく言った。

「いいのよ、魅琉鬼ちゃん。リクオ起きた？」

黄檗色の和服に身を包み、明るく笑うこの女性は、リクオの母である奴良若菜。とても中学生にになる子供が居るとは思えない。若々しく可愛らしい印象を抱かせる人物だ。魅琉鬼の最も尊敬する人物の一人である。

「ええ……つい先程。若菜様何かお手伝いする事は御座いますか？」

魅琉鬼は微笑んで答え、若菜の隣に立つ。袖を紅い襷で捲くりあげ、長い髪を後ろで三つ編みにして団子状にしていた。リクオから贈られた白椿の簪は今も大切に身に付けている。

「じゃ御みそ汁の味見てくれるかしら？　今日はそんなに凝った物は作ってないから」

「はい……畏まりました」

魅琉鬼は微笑んで小皿に味噌汁をよそって味見をする。味を確認すると、少しだけ手を加えて再度味の確認をしてにっこりと満足げな表情を浮かべた。

不穏な気配を感じ取り、台所にあった包丁を手にし、後ろを振り返って勢い良く投げつけた。壁に突き刺さった包丁の真横にはぬらりひょんの姿があった。どうやら朝食のおかずを摘み食いしたらしい。

「おじい様……摘み食いはおやめ下さいと何度申し上げれば分かって頂けるのですか？　それとも頭で覚えられないのであれば身体に御教えしましょうか？」

冷や汗をだらだらと流しながら後ろを振り返るぬらりひょん。口には出し巻き卵が咥えられていた。

「何じゃい……摘み食いくらいで目くじら立ておって……しかしお前さん、よくワシが居ると分かったのう……肝っ玉が冷えたわい」

「勘でございますよ……」

袖で口元を隠し、くすりと嗤う魅琉鬼。傍で見ていた納豆小僧が涙

眼になっていた。

朝食時、大広間に妖怪達が集まり食事を始める。リクオの隣には魅琉鬼が正座し座っており、リクオの茶碗にご飯をよそうのも魅琉鬼の仕事だ。以前つららがリクオの隣に座った際、にっこりと笑ってつららを自室に連れて行った後、暫く何かに怯えていたと言う。以後は誰もリクオの隣で食事をしなくなり妖怪達の間で暗黙の了解となった。

「お味は如何ですか？　リクオ様……」

魅琉鬼はリクオの顔を見つめにっこりと微笑んでいた。

「うん……美味しいよ。魅琉鬼も食べればいいのに……時間無くなっちゃうよ？」

「いえ、私の事は御気になさらず……御口に合って嬉しいです」

少し寂しそうに微笑む魅琉鬼にを傾げるリクオであった。

玄関先でリクオが身支度を済ませ立ち上がると、横で正座していた魅琉鬼が昼食の弁当を嬉しそうに手渡していた。

「ありがとう。でも本当に一緒に行かなくていいの？　なんなら待ってようか？」

「お気使いありがとうございます……ですが、後片付けがありますので……」

魅琉鬼は少々顔を伏せてリクオの申し出を断った。しかし、納得がいかないのか手に顎を乗せて唸るリクオ。暫く考え込んでいたが、ぽんと手を叩きこう言った。

「そうだ！　僕も手伝えばいいんだよ！　そうすれば一緒に行けるだろ」

「フフ……台所は男子禁制ですよ？　私もすぐに追いますからリクオ様は先に登校してくださいな」

リクオが『ちぇ』と言って渋々玄関の戸を開ける。魅琉鬼に手を振り勢い良く飛び出て行った。

リクオの姿が見えなくなるまで裾を摘みひらひらと手を振る魅琉鬼であった。

妖花（後書き）

如何だったでしょう？　１５禁で押さえたつもりです。気分を害した場合は行言ってください。

因みに魅琉鬼は昼リクオに対しては攻めで夜リクオに対してはドＭです。

餓鬼である魅琉鬼さんは空腹と言う概念がありません。飲み食いをしても満足感は決して得られない……これって結構キツイですよね

日常（前書き）

新キャラが出て来ます

日常

「若菜様。それでは登校の準備を致しますので、失礼します」

朝食の後片付けを終えた魅琉鬼が若菜に向かって恭しくお辞儀をした。すると、後ろを振り返り、にこりと笑い魅琉鬼に礼を言う若菜。

「助かったわ。魅琉鬼ちゃん！　いつもありがとう。こんないい許嫁が居るなんてリクオも幸せね……」

若菜は本当に嬉しそうな顔をして魅琉鬼を見つめる。しかし、その眼差しは何処か寂しげであった。袖で口元を隠し、照れたように顔を逸らす魅琉鬼。若菜は魅琉鬼の頭を撫でてこう言った。

「あの子の事、支えてあげてね……魅琉鬼ちゃんなら出来るって思うわ……お願いね」

魅琉鬼は驚いた顔をして微笑み控えめに頷いて、自室へ向かった。

リクオと同じ作りの広々とした和室。大きな化粧台と戸棚が一つ。背の低い木製の机の上には、参考書や教科書が綺麗に並べられている。其処には幼い頃のリクオと魅琉鬼が笑い合い寄り添う二人の写真も飾られていた。

和服から制服に手早く着替え、化粧台の前に正座して唇にリップクリームを塗る。簪を抜き取ると、長く、煌びやか紅い髪がスラリと落ちた。愛おしそうに簪を見つめ、軽く唇に押し当てて、茜色の布に包んでそっと引き出しに仕舞った。

セーラー服に身を包んだ魅琉鬼が、玄関の戸を開けて出ようとした時、丁度其処へぬらりひょんがやって来て声を掛けられた。

「おぉ……魅琉鬼。今から学校か……リクオの事頼んだぞ」

「はい……承知しています」

ゆっくりと振り向いて、上品に笑い玄関の戸を閉める。石造りの広々とした庭へ足を踏み入れ静かに囁いた。

「おいで……雪那≪せつな≫」

呼び声と共に白い煙が立ち込める。段々とその煙が薄れ、一匹の大きな化け猫が姿を現した。銀色の毛並みに紅い虎縞模様が身体中に浮き上がったその姿は美しく気高さに溢れていた。魅琉鬼の方へと頭を下げて嬉しそうに頬に顔を擦り付ける。魅琉鬼は困った様に笑い雪那の下顎を撫でてやった。

＞i３０２８８―３３１４＜

「フフ……相変わらず甘えん坊な娘……今日もお願いね。雪那」

そういうと雪那は地面に腹を付け、伏せた。魅琉鬼は背に飛び乗る。近くでこれを見ていたぬらりひょんが口の端を釣り上げ、煙管を口から離し煙を吹く。

「いつ見てもでデカイ猫じゃのう……屋敷にいる妖怪がビビっちまうわけじゃ」

「ふふ……この子はとても大人しくて賢い子ですよ。屋敷の皆さんとも仲良くなりたいと言っております。さぁ……雪那、私を学校へ連れて行って……生徒会長が遅刻しては皆さんに示しが付かなくなってしまうわ……驚かせないよう姿は見せないようにね……それでは御爺様、行って参ります」

そう言って空へと飛翔した雪那。地面を蹴った衝撃で木々が揺れ、風邪が巻き起こる。ぬらりひょんの羽織が大きく揺れ。烏天狗は腕を顔の前にやり片眼を閉じた。

「行きましたか……それにしても末恐ろしい女だ……まさか、あんな化け猫を使役するとは」

烏天狗は腕を組みうんうんと頷き、ぬらりひょんや周りに居た妖怪も深々と頷き同意していた。

学校へと行く途中、上空からリクオの姿を確認して胸をときめかせる魅琉鬼。島がリクオの首に腕を回し、ニタニタと笑っていた。どうやら宿題をリクオにやらせて来たらしい。魅琉鬼は頬に手を当てて溜息を漏らした。

「もう……リクオ様ったら……『良い人間』とは不正に手を貸す事ではありませんのに……あの男子生徒は後で厳重注意ね……あぁ…

…リクオ様、あんなに喜んで……どうしたものかしら」

魅琉鬼の呟きに雪那が心配そうな顔をして後ろを振り向く。魅琉鬼は優しく笑って頭を撫でてやった。

「ありがとう。雪那……ごめんなさいね……朝から貴方に愚痴を零してしまうなんて……」

無事に学校へ到着し、午前中の授業を受け終え今は丁度昼食時だ。魅琉鬼はリクオの教室の扉を控えめに開けて近くに居る女子生徒に声を掛けた。

「ごめんなさい……奴良リクオ君を呼んで頂けるかしら……」

教室内が一気にどよめく。それもそのはず、魅琉鬼は生徒会長を務めており、成績優秀、眉目秀麗、才色兼備として有名人なのである。中にはコアなファンもおり、『魅姫会長に踏まれ隊』なる物が非公式で設立されている。

女子生徒は緊張した面持ちで顔を紅くし直立不動になってしまっていた。心配した魅琉鬼が声を掛け直すうと、びくんと肩を跳ねらせてぎこちない足取りでリクオの席に向かっていった。

廊下に出ても騒ぎは収まらず、生徒同士が顔を突き合わせてコソコソと話しだす。男子生徒の中には恨みやねたみの篭った殺気をリクオに向けていた。

生徒会室へ向かう最中、女子生徒に微笑みかける魅琉鬼。すると顔を真っ赤にして黄色い声を上げたていた。

「それにしても相変わらず凄いね魅琉鬼の人気ぶり……教室へ来た時に皆からの殺気が凄かったよ」

苦笑いをして頭の後ろを掻くリクオ。すると、魅琉鬼が顔を伏せて申し訳なさそうに謝った。

「申し訳ございません。リクオ様……今日のお弁当に御箸を入れるのを忘れてしまって……以後、この様な失敗はせぬ様に致しますので」

しゅんとなってしまった魅琉鬼にリクオが慌てて腕を振って謝った。今は生徒会役員も出払って部屋には二人きり。長机が四角く並べてあり、掃除用具のロッカーや私物入れが用意されホワイトボードも設置されていた。

「せっかくですから此処でお召し上がりになりますか……？　今は誰も居ませんし……私が食べさせて差し上げます」

「い、いいよ……恥ずかしいし……魅琉鬼も友達と食べたいだろ……？」

リクオは乾いた笑いをして生徒会室を出ようとする。突如、リクオ

の袖の端を摘んで引きとめる。リクオは驚いて後ろを振り返ると、今にも泣きそうな顔をしてリクオの顔を見つめていた魅琉鬼。リクオはどうしていいか分からず錯乱状態に陥った。

「私と食事するのは御嫌ですか？」

「い、いや……その……えっと……そんな事ないです……はい……」

すると先程の悲しそうな顔が一転、眩い笑顔へと変わり、椅子へと腰を下ろした。観念したリクオはその日生徒会室で、魅琉鬼に食事を食べさせて貰ったと言う。

日常（後書き）

はい。如何だったでしょう。

『雪那』についてですが、魅琉鬼が地獄へ堕ちた際、鬼を斬り殺す旅の最中、『畜生道』にて拾った化け猫の妖怪です。
閻魔の息子であるゼロとの死闘に敗れた際、魅琉鬼の傍を片時も離れようとせずに居たため一緒に人間界へ転生させました。

ええ……分かってます。キララちゃんと一緒って言わないで……！
一生懸命考えたんです！

因みに人化します

雪那の紹介（前書き）

新キャラ雪那ちゃんの紹介

雪那の紹介

魅琉鬼の相棒『雪那人化ｖｅｒ』の紹介

【名前】雪那

【性別】女の子

【年齢】人間で言うと１２歳

【容姿】

・銀髪に紅いメッシュが入った長い髪（人化時）
・瞳孔が開くと、眼球は紅くなる。通常時は銀色の瞳
・白を基調とした着物に幾つもの花弁が刺繍された物を着ている

＞ｉ３０４２０―３３１４＜

＞ｉ３０４１９―３３１４＜

【性格と設定】

非常に恥ずかしがり屋で、魅琉鬼以外の者には大抵近寄らない。
人語を話す事が出来ず、スケッチブックに文字を書いてコミュニケーションを図る。
字の読み書きは、魅琉鬼に教わった。
人見知りな半面屋敷にいる妖怪と仲良くしたいとは思っては居るが、怖がられてしまう事が多い。
リクオに対しては姉の様に慕っている魅琉鬼を『心の底から笑顔にさせた凄い人』という認識をしている。

普段はチビ化した猫の姿で縁の下に隠れており、姿は見せない。
良太猫（りょうたねこ）に恋心を抱いている

雪那の紹介（後書き）

ざっとこんな感じです。
質問があれば感想板に

嫉妬（前書き）

タイトルの通りです。感想お待ちしております

嫉妬

「妖怪探索……ですか？」

陽が沈み切り、空一面に星が輝き出す頃、少し遅めの夕食を不機嫌な顔で食べるリクオ。魅琉鬼はその隣でキョトンとした顔でリクオを見つめる。空になった茶碗を差し出すと、丁度いい量でご飯が盛られる。多過ぎず、少なすぎずリクオの好みをしっかりと把握していた。

「そうなんだよ！　全く。妖怪を甘く見過ぎなんだ！　清継君達は……」

袖で口元を隠し、くすくすと笑う魅琉鬼。面白くないのか、リクオが顔を顰めた。

「そんな事を言っても、ご学友が危険な目に合わぬ様付いて行かれるのでしょう？　貴方様はお優しい方ですから……」

魅琉鬼の笑顔に頬を染めるリクオ。誤魔化す様に味噌汁を啜った。そんな様子を見て再びふわりと笑う魅琉鬼。二人の時間がゆっくりと流れる。襖の間から様子を伺っていた妖怪達の顔も自然と綻んで行った。

食事が終えると、リクオが食器を重ね台所へ持って行く。二人の間での約束。放っておくと一から十までリクオの世話をしたがる魅琉鬼に対して、申し訳なく思ったのか『食器を台所に運ぶくらいはやらせてくれ』と言ったのだ。暫く不服そうにしていたが、今ではすっかり定着している。

「じゃ、僕は御風呂に入って来るから」

「はい……行ってらっしゃいませ」

檜独特の香りに包まれ、広々とした浴室に白い湯気が立ち込める。リクオは木製の風呂椅子に腰を掛け、桶に溜めた水を頭から被り、シャンプーを洗い流していた。頭を振って水しぶきを飛ばす。タオルに石鹸を付けて、身体を洗おうとした丁度その時、背後から魅琉鬼の声が聞こえて来た。

「リクオ様……御背中を流させて頂きに参りました」

慌てて立ち上がるリクオ。制止の声を上げるも時既に遅し。浴室の扉が開き、腰に巻いていたタオルがパサリと落ちた。

「……まぁ」

「いっそ殺してくれ！！！」

白い長襦袢に紅い襷で袖を捲くりあげ、正座をして鼻歌を口ずさみ、優しい手つきで背中を洗う。その表情はこの上ない幸福感を感じている顔。世界広しと言えど、魅琉鬼をこんな顔にすることが出来るのはリクオだけだろう。

「僕の背中を洗うのってそんなに楽しい？」

「それはもう……幸せでございますよ？　心からお慕いしている殿方の御背中を流せるのは……それだけではありません……食事の用意も、片付けも……貴方様の衣服を洗濯するのも、朝起こして差し上げる事も私にとってはこの上ない喜びでございます」

リクオは顔を真っ赤にして蹲るが、何とかしてその言葉を口にした。

「そっか……ありがとう」

「いえ……」

所変わって魅琉鬼の寝室。二人が向かい合って正座していた。何とも言えない無言の空気。魅琉鬼と言えば俯いたまま、膝の上で握り拳を震わせている。この重圧に耐えきれなくなったリクオが口を開いた。

「あの……それで話って……？」

魅琉鬼は肩をびくんと跳ねらせて、顔を上げて、衿をギュッと掴んで瞳を潤わせながら熱い視線をリクオに贈る。声を震わせながら辛そうにこう言った。

「実は……明日の朝食とお弁当の仕込をしなければならなくて……今夜一緒に御伴することができないのです……私なりに最善の策を

考えたのですが、この子を代わりに連れて行っては頂けませんか？
雪那……入ってらっしゃい」

魅琉鬼の呼び声と共に障子が開かれる。部屋に入る前に一礼し、魅琉鬼の横に正座した。白い肌に銀色の髪と瞳。髪には所々赤色が混じっていた。白を基調とした着物に大小様々な花弁が散りばめられている。恭しくお辞儀をしてリクオに向かって微笑んだ。

「この子は雪那……猫又の妖しです。私とは繋がっていて、この子が感じたもの、見た物、聞いた物は直接私に届きます……万が一に危険な目に合われた場合は、私も全力で向かいます故……」

雪那が何処からともなくスケッチブックを取り出してマジックで字を書き始める。其処には『宜しくお願いします』とあった。

「うん……！　宜しくね。雪那……魅琉鬼も泣きそうな顔をすることないよ。そんなに心配しないで……」

「するに決まっています……貴方様に何かあったら……生きて行けません」

叫び声と同時にリクオの胸へと倒れ込みキツく抱きしめる。体制を崩し尻餅をついてしまったが、リクオは優しく笑い、魅琉鬼の頭を撫でた。

「ありがとう……ちゃんと帰って来るよ」

「はい……お待ちしています」

「ただいまぁ……ってあれ……みんなどうしたの？」

探索を終えたリクオ達が屋敷に戻ると、小妖怪達が蹲り、身体を抱きしめながら震えて何かに怯えていた。靴箱にも何匹か居るらしく、カタカタと音を鳴らしている。護衛で付いて行った青田坊とつららも額に汗を掻いていた。

「わ、若……私、体調が優れないのでこれで失礼します」

脱兎のごとく走り去って行くつらら。リクオが首を傾げていると、ある事に気付いた。

「そう言えば……魅琉鬼は……何時もなら一番に出迎えてくれるのに……」

その名を口にした途端、先程とは比べ物にならない程、妖怪達が震えだした。黒田坊が蒼い顔をしながら口を開く。

「魅琉鬼殿なら台所で明日の仕込をしております……若……くれぐれもお気を付けて」

「？」

台所に規則正しい包丁の音が響き渡る。リクオが帰ったにも関わらず、出迎える事なく黙々と材料を刻む魅琉鬼の姿が其処にあった。台所に足を踏み入れると、背筋が凍ったかのような錯覚に襲われた。

「た、ただいま……魅琉鬼」

ザクッっと大きな音がして包丁がまな板を叩く音が鳴り止む。ゆっくりと後ろへ振り返り満面の笑みでリクオに言った。

「御帰りなさいませ……リクオ様」

「う、うん……ところで……僕、魅琉鬼を怒らせるような事したかな……機嫌悪くない？」

リクオが恐る恐る尋ねても、満面の笑みを浮かべるだけで応えようとしなかった。

突如、服の裾を何者かに引っ張られる。振り返るとスケッチブックを片手に少々不機嫌そうな顔でリクオの顔を睨み、ペンを走らせる刹那の姿が。其処には大きめの字でこう書かれていた。

『にぶちん』

リクオが驚きたじろいでいると、今まで無言だった魅琉鬼が口を開いた。

「それにしても、驚きましたわ……妖怪に襲われそうになった家長さんを身を呈して護ろうとするだなんて……それに、震える家長さんの前に立って……目を瞑れなんて、私とは手を繋ぐ事さえ躊躇われるのに……リクオ様にあのような甲斐性がありましたのね……」

「（そ、それかーーー！！）あ、あの……あれは、その……」

リクオが必死になって頭を回転させるが、止まる事のない魅琉鬼の口。

「いいのですよ……『浮気は男の甲斐性』と言いますものね……私など放って他の女の所へ行っても構いませんよ……貴方様が戻るのを『信じて』待っていますから」

妙に『信じて』の部分を強調し、くすりと笑う。リクオは顔中汗まみれになって大声で叫んだ。

「だ、だから……違うんだってーーーーーー！！！！！」

リクオの悲痛な叫び声が闇へと溶けた。

嫉妬（後書き）

感想お待ちしております。

番外：逢引（前書き）

リクオのキャラ崩壊が激しいです

番外：逢引

「あ、あ、あの……魅琉鬼……！！　きき、今日、僕とデートしない！！？」

私が居間で洗濯物を畳んでいると、物凄い勢いで襖を開けてリクオ様が大きな声で叫ばれました。瞳を硬く閉じて握り拳を震わせながら、私の返事を待っておられます。しかし、私も余りに唐突な申し出に混乱してしまい、上手く言葉が出て来ません。

それはもう飛び跳ねるくらい嬉しいはずなのに。私は何も考えられなくなり、膝に置いた洗濯物を畳み、そのまま箪笥に仕舞いました。自分でも顔が熱くなるのが分かります。両手で頬に触れるとやはり熱くなっていました。振り返る事も出来ず、小さな声で呟きます。

「……は……い……分かりました。支度をして参りますので少々お待ちいただけますか？」

あぁ……頬が緩んでしまう……こんな顔、リクオ様に見られる訳に参りません。私は、台所で夕食の準備をされている若菜様に事情を話し、外出の許可を頂きました。駆け足で自室に向かい身支度を整えます。化粧台の前に座り、軽く化粧をし、髪を三つ編み団子状に結って、リクオ様に頂いた簪を挿し、部屋を出ます。

慌てて来ましたが、可笑しな所はないかしら……私ったら、舞い上がり過ぎですよ！　リクオ様との二度目の逢い引きですもの……もう少し着飾った方がいいかしら？　でもこれ以上待たせる訳には……

色々な事が頭の中に渦巻いている内に玄関先まで来てしまいました。

心臓の音が五月蠅いです。何だか息苦しく感じて来ました。リクオ様は直立不動で玄関の扉を見つめておいでです。

胸に手を当てて、深呼吸をして心を落ち着かせます。ちゃんと可愛らしく笑えるかしら……

「お待たせして申し訳ありません。リクオ様」

私の方へ振り返ると、瞳を見開いて驚かれています。何か可笑しな所でもあるのでしょうか……？　不安で押しつぶされそう。

「……っ！　あ、あぁ……じゃ行こうか」

リクオ様は笑ってそう言って下さいました。よかった……どうやら可笑しな所があった訳ではなさそうです。

「え……魅琉鬼の洋服……？」

陽が傾き出した頃、僕は爺ちゃんの部屋に呼び出されて、唐突に魅琉鬼の洋服を一着買う様に言われた。でも、いきなりすぎじゃないか？

湯呑みを傾けて茶を啜ると溜息を吐いて、こう続けた。

「そうじゃ……あ奴もお前と同じ学校へ通わせる事は知っておるな？　もう編入の手続きは済ませた。週明けには六年生として学校へ行ってもらう」

「……そりゃ、知ってるけど、その事と洋服を買うのとどう関係があるの」

爺ちゃんは懐から煙管を出して火を付ける。煙を吐き出すと呆れたように首を振って僕を見る。なんだよ、その顔……すっごいムカつく。無銭飲食爺のくせに。

「お前さんも鈍いのー。魅琉鬼の事じゃから洋服何ぞ持っとらんじゃろ……着物で小学校なんか行ってみぃ……絶対に浮いてしまうわい」

あ、言われてみれば魅琉鬼の洋服姿なんて見た事ない……いつも着物着てたっけ。すごく大人っぽくて綺麗なんだよなぁ……やば、顔

にやけそう。

「そう言えばそうだね！　でも、そんなお金持ってないよ」

「その辺は心配せんでいい。それよりも、お前さん。ガゴゼの一見以来『でぇーと』しておらんじゃろ？　情けないのぉ……ワシの若い頃は婆さんを色々連れまわしたというに」

またムカつく顔で笑ってる。五月蠅いなぁ……仕方ないだろ……なんか、魅琉鬼と話すだけでも緊張しちゃうんだから。あの笑顔見ると、どうしていいか分からなくなるんだよ！　そりゃ僕だって一緒に出かけたりしたいけど。

「どうせその後、婆ちゃん倒れたんだろ。爺ちゃんの場合は好き勝手に連れまわして困らせてたって牛鬼が言ってたよ」

爺ちゃんが肘掛けからずるっと落ちる。あ、図星だったんだ。婆ちゃんも大変だったろうなぁ……

襖の向こう側から鼻歌が聞こえて来る。魅琉鬼の声だ。凄く透き通った声なんだよなぁ……緊張が和らいで来たぞ！　今なら行けるか！！？

僕は意を決して襖を開けて叫ぶ。うわー声上ずっちゃったよ……僕は片目をうっすらと開けて魅琉鬼の顔を盗み見る。か、固まってる……やっぱ急すぎるか？　『何言ってんのコイツ』的な顔してる。あ、泣きそう。

何の反応も示さないまま、洗濯物を畳んで箪笥に仕舞って、小さな声で『はい……』って言ってくれた。マジで……？　マジで？　やった！！！　魅琉鬼と久しぶりに出かけられる！　しかも、しっかり『デート』って言ったぞ！

そのまま僕は爺ちゃんに貰った『軍資金』を財布に入れて、懐へ仕舞った。うー。待つのって緊張するぞ！！　でも、魅琉鬼ってどんな服が似合うんだろう……まぁ、何着たって似合うだろうけど。あー……くっそ！！　カナちゃん達の話し聞いとけば良かった。

「お待たせして申し訳ありません。リクオ様」

「（キターーー！）」

僕が後ろを振り返ると、魅琉鬼がにっこりと微笑んで僕を見つめて居た。いつもと少し雰囲気が違う……？　口紅とか付けてるせいかな……いつにも増して大人っぽいぞ！！？　時間が止まるってこういう事なのかな？　僕はつい、つい見惚れてしまっていた。

浮世絵町のアーケドに到着。うわ、人が一杯だ。これじゃ逸れちゃうよ……。僕が呆気にとられていると、不意に魅琉鬼が袖を引っ張って来た。ななな、何！？　なんか顔赤くして泣きそうなんですけど、僕何かしたっけ！？

「あ、あの……リクオ様……宜しければ、手をお繋ぎ頂けませんか？」

「（……ナニ、コノ、カワイイ、イキモノ）……モチロンダヨ」

僕がそう言うと、幸せそうに笑って手を握って来た。う……わ……柔らかい。何だか良い臭いする……はっ……僕は一体何考えてんだ！！

僕達は適当にアーケード街をぶらついた。途中、何度か人の波に飲まれそうになったけど、手を離す事なく居る事が出来た。

僕はカナちゃんから教えてもらったクレープ屋さんを教えてあげたりしたら物凄く喜んでくれた。カナちゃんに教しえて貰ったって言ったら、視線を落として『そうですか……』とだけ言って俯いちゃった……あれ、何か地雷踏んだ？

楽しい時間が過ぎて行く。相変わらず、手を繋いだままの僕達。不意に魅琉鬼の足が止まる。其処には大きなショーケースに可愛らしいワンピースの服が飾られていた。

「わぁ……素敵ですね……リクオ様」

僕はそう言って瞳を輝かせている魅琉鬼の横顔に見惚れた。首を振って我に返る。覚悟を決めて店内に入ると、僕は意の一番にこう言った。

「あの……外に飾ってある服が欲しいんですけど……！！」

店員さんが、一斉に僕の方を見る。何だか恥ずかしい。スーツを着たお姉さんが僕達の前にしゃがみ込んでにっこりと笑う。思わずドキッっとしちゃった……ってそうじゃない！　早く言わなきゃ。

「その子へのプレゼントですか？」

「あ、えっと……はい……」

「少々お待ち下さいね……お嬢さん。試着室開いてるから、着てみない？」

魅琉鬼はトントン拍子に事が運んで軽く混乱してたみたいだ。僕の顔をじっと見て困っていた。僕が笑って『行ってきなよ』と言ったら、嬉しそうにお姉さんの後へ付いて行った。

「素敵なガールフレンドだわね……いいわぁ……若いって」

僕はどう応えていいか分からず小さく頷くと背中をバンバン叩かれた。

家に帰って、晩御飯を食べた後、魅琉鬼の部屋へ行き正座して、さっき買った洋服に着替えるのを待っていた。

「リクオ様……お待たせしました」

その一言に僕の心臓は大きく跳ねた。控えめに開かれた襖。そして魅琉鬼が入って来る。僕がゆっくりと顔を上げると、其処にはランドセルを背負った魅琉鬼の姿が。思わず、言葉を失う。黄檗色のブラウスに桃花色のワンピース。想像していたよりも遥かに可愛らしかった。

「あの……リクオ様……私、洋服を着るのは正真正銘初めてで……何処か可笑しな所はございませんか？」

魅琉鬼が不安そうな顔をして僕を見つめる。

「……とっても可愛いです」

僕がそう言うと、花が咲いたような笑顔を向けてくれた。あ、僕はこの笑顔が一番好きなんだ

>
i
3
0
7
4
8
—
3
3
1
4
<

番外：逢引（後書き）

リア充ェ……！！

分かる人には分かると思いますが、単行本1巻のおまけ漫画ネタです。

ヤヴェ……自分で作ったキャラに萌えてしまった。

感想お待ちしております

盃（前書き）

若様カッコいい

盃

『みなさん、下校の時刻となりました。校内に残っている生徒は、電気を消して、窓を閉めて、車に気をつけて帰りましょう』

下校時刻を告げる放送が響き渡る。陽も沈み掛け、橙色の光が教室の窓からリクオを照らす。雑巾を硬く絞り、黒板を水拭きをしていた。どうやら面倒な教室掃除をリクオに押し付けて、本来、当番であるはずの生徒は、一様に帰ってしまったようだ。

『奴良リクオはお人よし』その人の良さに付け込まれ、良い様に使われてしまう事も少なくない。当の本人は、『今日も良い事をした』と喜んでいるようだが、魅琉鬼にとっては頭を痛ませる一因なのだった。

「よし、こんなもんか」

額の汗を拭い、掃除用具の片付けを始める。丁度その時、教室のドアが開かれた。

「リクオ様……また雑用を押し付けられたのですか？　この所毎日ではありませんか……」

物憂げな表情でリクオを見つめる。リクオは振り向いて頭の後ろを掻くだけだった。魅琉鬼はそんな彼の顔を見て『仕方ない』と心の中で呟いて柔らかく微笑んだ。二人で戸締りの確認をして、職員室に鍵を返す。もう殆どの生徒が下校を終えていたため、魅琉鬼はここぞとばかりにリクオに寄り添っていた。

「そう言えば、今日は生徒会遅かったんだねっ……！」

「ええ……近々転校生がやって来ますから、その時の学校案内役を私が仰せつかりましたので、その打ち合わせを……」

魅琉鬼はリクオの小指に自分の小指を絡ませる。やがて、ぎこちない手付きで魅琉鬼の手を包むリクオ。汗ばんだ手から緊張が伝わって来る。魅琉鬼の心は温かな物で満たされていった。

「お前もワシの孫なら、家を継ぎ悪の限りを尽くす男にならんか――！」

ぬらりひょんの叫びが屋敷中に響き渡る。どうやら帰った矢先に口論になったらしく、リクオは祖父を睨みつけ、こう言い放った。

「断る」

リクオの隣で、魅琉鬼が口元を隠し上品に笑う。怒るぬらりひょんを無視しリクオは玄関で靴を脱ぐ。
魅琉鬼も着替えに自室へと向かって行った。

「鴆一派の蛇太夫様と鴆様がお出でに？」

若菜と夕食の支度へ勤しむ魅琉鬼。長い髪を後ろで団子状に結って、いつも通りに白椿の簪を挿していた。驚きを隠せずに瞳を見開く。
それもそのはず、『薬師寺一派』組長鴆と言えば、その羽に猛毒を持ち、非常に身体が弱く、床に伏している事が多い事で有名な幹部の一人。

その病弱な彼が態々本部へと出向いたというのだ。何か余程の事があったのだろうかと、顎に手を当てて考え込む魅琉鬼。

「そうなのよ。今、リクオと二人で話してるはずよ？　悪いんだけど、お茶を出しに行ってくれるかしら」

「はい。畏まりました」

鹿脅しの音が鳴り響く。リクオがそっと障子を開けると、胡坐を掻き、腕組みをする鴆の姿が。リクオを見るなり笑顔になり、姿勢を正して挨拶を交わした。

「お久しゅうございます！　若」

「鴆さん久しぶり！」

旧友との再会に喜びの声を上げるリクオ達。暫くすると、襖の向こう側から魅琉鬼の声が聞こえて来た。

「失礼致します……お茶をお持ちいたしました」

覗き見していたつらら達が一斉に道を開ける。二人の前に湯呑みを

置いてく。ちらりと鴆の顔を見ると、額から汗をにじませ、警戒を緩めずに魅琉鬼を睨む。にこりと返すと視線を逸らし舌打ちをした。

退室して間もなく、リクオの悲鳴と鴆の怒鳴り声が台所にまで響き、魅琉鬼は急いで客間へと向かう。其処には毒羽がリクオを襲っていた。彼の前に立ちふさがり羽を木端微塵に切り刻んだ。

「女の後ろへ隠れるとは、何たる腑抜け！！　恥を――――……」

突如、鴆の背中に凄まじい悪寒が走る。

「畜生風情が……リクオ様に向かって舐めた口を利きますわね……その儚い命、今この場で散らしてみますか？　鴆様」

その凄まじい威圧にリクオまでもが腰を抜かした。魅琉鬼はゆっくりと後ろへと振り返り満面の笑みを浮かべて、リクオに手を差し伸べた。

「御無事ですか？　リクオ様」

「う、うん。何ともないよ……」

翌日、昨日の侘びの品である酒を片手にリクオが玄関先で魅琉鬼と話し合っていた。申し訳なさそうにリクオの両手を包み込んで謝る魅琉鬼。リクオはドギマギしながらも、笑顔で応える。

「そんなに謝らなくたっていいよ……鳩さんだって分かってくれるさ……」

「しかし……」

リクオが魅琉鬼の頭に手を置いて、優しく撫でる。落ち着きを取り戻したのか、朗らかに笑ってリクオを見送る事を決意した。

「いってらっしゃいませ……リクオ様。とびきり美味しい夕食を用意してお待ちしておりますので……どうか、御無事で」

「――……はぁ」

「心配……？　リクオの事」

包丁で材料を刻む音が、鳴り止む。若菜は驚く魅琉鬼に笑ってこう言った。

「さっきから上の空よ？　何回か声掛けてたけど、気が付かないんだもの……」

「すみません……」

視線を逸らし物憂げな表情をする。胸の前で拳を握り、眉をひそめた。そんな様子を目のあたりにした若菜は思わず苦笑し、『いってらっしゃい』とウィンクをした。

勢い良く頭を下げ、縁側へと飛び出して、雪那を呼びよせ、急ぎリ

クオの元へと飛び立った。

道中、上空から竹藪の中から蛇大夫に襲われている二人を発見する。急ぎ急降下し、手にした番傘から仕込刀を抜刀する。しかし、次の瞬間、魅琉鬼は息を飲んだ。リクオが妖怪へと覚醒したのだ。長い蛇の首を切り裂き、返り血がリクオの頬を汚す。

雪那がふわりと地面に降り立ち、魅琉鬼がゆっくりとリクオの元へと歩み寄る。鞘に刀を戻して魅琉鬼を見つめ、口の端を釣り上げて笑うリクオ。　魅琉鬼の心臓が大ききく跳ねた。風が吹き抜けて、長い髪を揺らしす。

「何だい？　来たのか……丁度良かった。今からこいつと盃交わすんだ。酌、頼めるかい？」

「……はい。畏まりました……リクオ様」

盃（後書き）

魅琉鬼さん……きっつ……揺るがないドSぶりにちょっと安心な作者

感想お待ちしております

天敵（前書き）

ゆらちゃん登場

天敵

枝垂れ桜が夜風に揺れる。桜の花びら舞い散り、月明かりがリクオを照らしていた。広々とした石造りの庭園。一歩一歩足を踏み出す事に、砂利が音を鳴らした。

「――――……何でこんなに静かなんだ」

季節柄、桜は既に散ったはず。しかし、枝垂れ桜に枝には、美しい花弁が満開に咲き誇っていた。突如、突風が吹き荒れ、桜の花弁がリクオの視界を覆った。硬く閉じた瞼をゆっくりと開く。其処には、太い幹に腰をおろし、片足を垂らして遊ばせながら、盃を手に月を見つめる青年の姿があった。

不意にリクオの方へと振り返った青年。長く、艶やかな白髪を風に靡かせ、真紅の瞳でリクオを見下ろし、口の端を釣り上げて、盃を傾けこう言った。

「――――……よう『昼の』俺」

「……え」

次の瞬間、視界が白く染まって行った。

小鳥の囀りで、眼を覚ます。酷く寝苦しかったらしく、顔中から汗が噴き出していた。身体を起こそうとしても力が入らずに、身動きが出来ない状態だった。ふと、視線を落とすと、布団が不自然なほどに盛り上がっていた。

「……何してるの、魅琉鬼」

名を呼ばれると、リクオの上に覆いかぶさる様にして、抱きついていた魅琉鬼が顔を出して朗らかに微笑む。頬を高揚させて、熱い吐息を漏らしながらリクオを見つめていた。白く細い指を襟元まで這わせて行く。リクオの身体が小さく反応すると、嬉しそうな表情で、胸元へ手を差し込む。

「あの、本当に不味い事になって来てるから、退いてもらえませんかね？　魅琉鬼さん」

冷静な対応をしている様に見えるが、内心は心臓が張り裂けそうなほど、力強く脈打っていた。何も言わず、顔を寄せてゆく魅琉鬼。艶やかで柔らかそうな唇がリクオに迫る。静かに、ゆっくりと耳元へ寄せて行き小さく呟いた。

「昨夜はあんなに激しかったのに……（妖怪的な意味で）」

「その発言は、大きな誤解を生むから、やめようね」

「いけずなお方……」

妖艶な笑みを浮かべながら立ち上がり、乱れた衣服を整えて部屋を出た。襖が閉められると、暫く呆然と天井を見上げながら、先程見た夢の事を思い出す。

「あれは……僕？」

大広間の障子を開くと、其処では朝から妖怪達が飲めや歌えやの乱痴気騒ぎをしていた。熱燗をラッパ飲みする奴もいれば、腹踊りをしている連中までいた。突如烏天狗が、涙を滝の様に流しながらリクオに迫る。

驚き一歩引いてしまうが、構わず大声で叫んだ。

「若ーーー！！　拙者感動致しました。ようやく奴良組みにも光明が見えて来たのだ！　時代が変わる……戦慄さえ、覚えましたぞ」

「何なんだ……一体」

リクオが溜息を吐き、机に座ると、襖が開かれて、魅琉鬼が姿を見

せる。その手に持たれて居たのは、巨大な尾頭付きの刺し身盛だった。リクオが顔を引きつらせながら指でさし、尋ねると、満面の笑みを浮かべながら、楽しそうに語りだす魅琉鬼。

「昨晩の覚醒お見事でしたわ……リクオ様……私、一生忘れません。あの壮大な背中。『俺が三代目を継ぐ』と、凛とした声で宣言された時、私はもう……！」

目を閉じて両頬に手を当て大きく左右に首を振る。珍しく我を忘れ、高揚している魅琉鬼に苦笑するしかないリクオであった。

「あれ、魅琉鬼もう行くの？　珍しいね」

リクオが朝食を済ませた後、いつもなら後片付けをしているはずの魅琉鬼がセーラー服に着替え、玄関先で靴を履いていた。リクオの方に向き直り、申し訳なさそうに頭を下げる魅琉鬼。リクオは頬を指で掻いて、苦笑した。

「申し訳ございません……今日は、先日お伝えした転校生が登校してくるので、早めに学校へ行かなければならないのです……リクオ様をお見送り出来ないのは、身を斬るよりも辛いのですが……」

そう言って、顔を逸らし涙ぐむ魅琉鬼。リクオがそっと頭に手を置き紅い髪を撫でてにこやかにほほ笑んでこう言った。

「そっか。魅琉鬼は生徒会長だもんね、偉いよ。案内頑張ってね」

「……はい」

無事学校へと登校を済ませ、職員室で転校生を待つ。やがて、一人の少女が担任と魅琉鬼の前へやって来て、行儀よく頭を下げた。背は魅琉鬼よりも低く短めの黒髪に大きな瞳。男子受けが良さそうな、可愛らしい女子生徒だった。

「花開院ゆらと申します、今日からお世話になりますさかい、どうぞよしなに……」

京都弁独特の発音で、丁寧な挨拶をしてにこり、と微笑んだ。微かに魅琉鬼の眉が動く。感情を読み取られぬ様、爽やかな笑みを浮かべて、名乗りを上げる。

「初めまして、花開院さん。生徒会長の椿魅姫と申します。一先ず教室へ案内いたしますので、私について来て頂けるかしら？」

ゆらは笑顔で応えて、担任と一緒に職員室を出た。

たわいもない話をしながら教室の近くの廊下へ来ると、リクオ達が廊下で談笑していた。

「皆さん、廊下で騒がれるのは感心しませんよ。もう授業が始まりますから、教室へ行きなさい……」

魅琉鬼に注意されて、島の頬がだらしなく緩む。女子たちは白い目で島を見るが、当の本人は気にしないようだ。リクオが少し面白くなさそうな顔をする。それを魅琉鬼が見逃すはずもなく、リクオを見つめて妖艶に微笑んだ。

「奴良君、少し御話しがあるので、生徒会室まで来て頂けますか？　先生には私から言っておきますので……花開院さん、申し訳ありませんが、私は急用が出来ましたので、困ったことがあったら、クラスの方々に聞いて下さるかしら？　皆さん頼みましたよ。さ、行きましょ奴良君」

皆が呆然としている最中、つららが大きな声で挨拶をした。青田坊まで学生服を着ていた。

「おはよーー！　あれ、奴良君は？」

島はつららの登場にまたもや頬を緩める。ゆらやカナが先程起った出来事をつららに話すと、拳を握りながら歯を食いしばった。

チャイムの音が鳴り響く。授業開始の合図だ。二人はパイプ椅子に腰かけて、無言の時を過ごす。魅琉鬼が深刻そうな顔でリクオを見つめ、口を開いた。

「あの、花開院ゆらという女子生徒……恐らく陰陽師だと思われます。リクオ様は、なるべく接触を避けて頂きたいのです……勝手な申し出だとは、重々承知なのですが、お願い致します……貴方様を危険に晒したくはないのです……」

リクオの両手を包み込んで、自分の胸の前へ引き寄せる。汗ばんだ掌は微かに震えていた。

「陰陽師って……本当なの？」

「はい……ほぼ間違いありません」

怪訝そうな顔をしながらリクオが魅琉鬼に疑問をぶつけた。

「でも、魅琉鬼はつららや青みたいに人間に化けてないよね？　髪も紅いし、耳もそのまま……前から思ってたけど、何で皆不審がらないの？」

リクオの問いに朗らかに笑って答えた。

「私は、リクオ様以外の人達に幻術を掛けているのですよ。普通の人間から見れば、私の髪と瞳は黒く見えるのです。ゆらさんはつらさんや青田坊の正体に気付いていないようでしたので、恐らく私の事にも気付いていないのでしょう……」

「そうなんだ……」

リクオはホッと胸を撫で下ろす。すると、突然、魅琉鬼が自分の胸にリクオの手を押し付けた。慌てふためくリクオの姿に、妖艶な笑みを浮かべ、顔を近づける。

「それよりも、リクオ様……先程、島と言う男子生徒が、私を見た時、顔を顰めていらっしゃいましたね……それは、私の自惚れでございますか？」

「え！？　いや、あの……その……」

顔を俯かせて顔を紅くするリクオ。魅琉鬼は両腕で抱き寄せた。リクオの頭を柔らかな物体が包み込んだ。魅琉鬼は両目を閉じて、リクオの髪を撫でた。幸せそうな顔で微笑んで、口を開いた。

「私の全ては貴方様の物です……身も心も、全部全部リクオ様に捧げております……他の殿方に心が揺れる事など、決して有りはしないのですから……」

天敵（後書き）

はい、終了。

如何だったでしょうか？

感想、ご指摘、ご意見、お待ちしております

特別企画：誕生日（前書き）

リア充ェ……

特別企画：誕生日

今日は私の大切なリクオ様の誕生日。腕によりを掛けて美味しい料理を作らなくてはなりません。

リクオ様の喜ぶ顔がみたい……切にそう願います。私は心弾ませながら朝食の準備を始めます。無意識のうちに鼻歌を口ずさんでいたらしく、隣で若菜様がくすくすと笑っておいででした。いやだわ……そんなにも態度に出てしまっていたのかしら……

「嬉しそうね……リクオは本当に幸せ者だわ」

私は、無性に恥ずかしくなり顔を俯かせます。自分でも顔が熱くなるのが分かりました。私ったらはしゃぎ過ぎてしまったわ……恥ずかしい。けれど、若菜様にそう言って頂けるなんて、嬉しいです。

「いえ……すみません……お恥ずかしい所をお見せしてしまいましたわ」

「いいのよ。そうだわ……そろそろリクオを起こしてきてくれるかしら」

私の心が温かな物で満たされて行きます。今日もリクオ様を起こしに行って差し上げられる。どんな些細なことでもリクオ様のお役にたてるのはこの上ない幸せだわ……今日はどんな寝顔をしていらっしゃっるかしら……きっと可愛らしい御顔でしょう……

期待に胸を膨らませて台所を後にします。部屋の前で正座をしてリクオ様の名前を二度呼びます。返事が返って来なかったのでそっと

障子を開き、中の様子を伺います。やはりまだ寝ていらしたようですね。
ふふっ……可愛い寝顔……お布団の中で規則正しい寝息を立てていらっしゃいますわ……この寝顔をいつまでも見て居たくなってしまいます。私はゆっくりとリクオ様の元へ歩み寄り、肩を揺らしました。すると、少しだけ眉を動かしてゆっくりと瞼が開かれます。

「……あれ、魅琉鬼。ぉはょう……」

身体を起こし、片指で目を擦ります。その仕草が堪らなく可愛らしくて、思わず抱きしめたくなる衝動を必死に抑え込みました。

「おはようございます……リクオ様。誕生日、おめでとうございます。これからも健やかでいて下さいね……」

リクオ様が、瞳を見開いて驚いていらっしゃいますね……私、何か可笑しなことを申し上げたのでしょうか？　リクオ様は頬を染めて、頭の後ろを掻き、こう仰いました。

「そっか……今日は僕の誕生日か……ありがとう。一番最初に魅琉鬼から『おめでとう』が聞けて嬉しいよ」

心臓が大きく跳ねます。リクオ様が片手で私の頬を撫でて下さいました。その手を包み込んで微笑むと、閉じた瞳から涙が零れ落ちました。リクオ様……大好きです。ずっと御側に居させて下さいね……

朝食を済ませて、後片付けをしに台所へ向かうと、若菜様が今日くらいは一緒に登校しなさいと言って下さいました。私は急ぎ制服に着替え、玄関に向かうと、丁度靴を履いている最中でした。

「あの……リクオ様……今日は、私と一緒に登校して頂けませんか？」

振り返ったリクオ様が口を開けて、私の顔を見つめておられます……恥ずかしい……思わず両手でスカートの裾を掴みます。リクオ様は暫くすると、顔を赤くしながら了承して下さいました。困らせてしまったかしら……？

玄関を出て、通学路をゆっくり歩きます。まだ登校時間には早いのか、殆ど人が居ませんでした。すると、私の手をリクオ様の掌が包みます。驚いて隣を見ると、御顔を真っ赤にされたリクオ様が、明

後日の方向を見ておられました。私は、しっかりと指を絡ませて、手を繋ぎました。

幸い、他の生徒に目撃される事なく、登校する事が出来ました。途中、氷麗さんが電柱から悔しそうに私を睨みましたが、さほど気になりませんでした。

「今日の昼休みは、一緒に昼食をとって頂けますか？」

「う、うん。構わないよ」

多少戸惑いながらも、快い返事をして下さり、私の胸の内は幸せで満たされて行きます。いけないわ……どんどん甘えてしまいそうになる……けれど、今日くらいは沢山御側に居たいと願っても、構いませんよね？

昼食時、人気のなくなった生徒会室でお弁当を広げます。リクオ様はパイプ椅子に腰かけ、お茶の準備が出来るのを待っていました。私は隣の椅子へ座り、茶を入れてリクオ様に手渡します。

目の前に広げられたお弁当はリクオ様の好物ばかり。少しだけ量が多くなってしまいました。

「リクオ様……はい、どうぞ」

私は、厚焼き卵をリクオ様の口元へと運びます。少々恥ずかしがりながらもしっかりと食べて下さいました。その後の『美味しい』の一言が私を満たしてくれます。このお方の傍に居る事が出来て本当に幸せでございます。

「ごちそうさま……美味しかったよ」

「はい……お粗末さまでした」

夜、屋敷中の妖怪が飲めや歌えやの大宴会を開いておりました。リクオ様も『夜』のお姿に変わり、ぬらりひょん様の隣で酒を飲まれています。私が御酌をしに寄り添うと、羽織を掛けて下さいました。周りの妖怪達が、驚いたように一斉に此方を向きました。

「リ、リクオ様……！」

「ん？　気に入らなかったかい？　別に構いやしねぇだろ？　お前は俺の隣でずっと酌してろ」

いつもと違う強気な態度に私が戸惑っていると、リクオ様が口の端を釣り上げて笑って居られました。私は、顔を赤らめて、リクオ様の方に頭を乗せます。

「お前の慌てふためく顔は、滅多に見られねぇからな……少し得した気分だ……」

「もう……意地の悪い人」

何故かしら？　騒いでいた妖怪達が一斉に溜息を吐きながら掃けていってしまいました。何か凄く呆れた顔をされてしまいましたが……これは、これで、邪魔者が消えて嬉しいのですが……

「リクオ様……久々に耳掃除をさせて頂けませんか？」

「ん？　あぁ。構わねぇよ……」

「では、少し縁側で待っていて下さいな……」

星が夜空満点に光り輝いて、ゆっくりと至福の時が流れて行きます。私はリクオ様の頭を膝に乗せて、丁寧に耳の垢を取り除いて行きました。

＞i31777―33314＜

「リクオ様……痛くはありませんか？」

「丁度いいぞ……そういや、最近はやってなかったな……結構気持ちいいもんだ……」

「本当でございますか？　嬉しいです」

リクオ様は、片目で私の顔を見つめます。心地のいい空気につい歌を口ずさむと、良い声だと褒めて下さいました。あぁ……本当に幸せ……幸せすぎて、怖いくらい。どうか、この幸せが何時までも続く様に見守っていて下さいね。お母様……

特別企画：誕生日（後書き）

畜生、リア充め。
俺だって彼女欲しいのに……爆発して下さい

本当は、昨日の内にあげたかったのですが、スイマセン
感想、お待ちしております

確信（前書き）

あんまり原作と変わらないうえに端折った部分もあるので期待は禁物です

確信

「リクオ様……！　私は反対です！　何故御自身の身を危険に晒すような真似をなさるのですか」

魅琉鬼の悲痛な叫びが自室に響く。そのまましがみ付く様に抱きしめた。頬からは大粒の涙が零れ落ちる。戸惑いながらも、そっと腕お回すリクオ。濡れた瞳で見つめる顔は、リクオの胸を大きく跳ね上げらせた。

「陰陽師が近くに居るのですよ……もしも貴方様に何かあればと思うと……私は壊れてしまいそうになるのです……」

リクオは頬を染めたまま頭の後ろを掻いた。苦笑し優しく肩を押して身体を少しだけ離す。尚も泣き続ける魅琉鬼に対し、瞳を細めてリクオが言った。

「心配してくれるのは嬉しいけど、僕ってそんなに頼りないかな？」

魅琉鬼ははっとなり視線を落とし蚊の鳴くような声で呟いた。

「そんな言い方……狡いではありませんか……」

＞ｉ３２３２２｜３３１４＜

「ははっ……ごめん」

誤魔化すような笑い方をするリクオに対し、珍しく拗ねた様にして軽く睨み付けて胸の前で拳を握り決意を固める魅琉鬼。

「私も一緒に参ります……」

「え？」

驚いた顔をするリクオにもう一度宣言をした。

「私も一緒について行きます！　今回ばかりは氷麗さんだけに貴方様を任せる訳には参りません。私もその課外活動へ参加させて頂きます」

「……」

呆然とするリクオを余所に部屋を出て行く魅琉鬼。暫くその場で立ちすくむリクオであった。

歴史を感じさせる洋館屋敷の正門前で呆れ気味に立ち尽くす清十字探偵団の面々。薄気味悪さが滲み出ているためか、カナが多少怖気気味にリクオの袖を片手で握りしめる。少し遅れて魅琉鬼が到着し、作り笑顔でリクオを見つめる。

「随分と仲が宜しいのですね……お二人とも……氷麗さん？　どうしたのですか？　そんなに震えて……何を怯える必要があるのですか？」

此処で空気を読まず清継が歓喜の声を上げ、魅琉鬼の両手を包むように握った。

「おお！　魅姫会長も来られたのですか！　貴方が同志だったとは驚きですが歓迎します」

「生徒会で申請を出して居なかった非公式の倶楽部が放課後活動するという話を聞いた物ですから……監督に来ました……それよりも、その（薄汚い）手を御放し頂けますか？」

凄まじい悪寒を感じ慌てて手を離す清継。

「おっと、し、失礼……島君さぁ行くよ！」

取り繕う様に島の腕を取り屋敷へと足を進めた清継達。横から感心したような声でゆらが声を掛けて来た。

「へぇ……会長はん、普段はお着物着てはるんですか。着こなしもばっちりやなぁ」

すっと瞳を細め、袖で口元を隠し上品に笑う魅琉鬼。

「ええ……お稽古事が多いものですから家へ帰れば大抵はお着物に着替えているのですよ」

大きな扉を開けると、広々とした部屋にショーケースが立ち並び曰く付きの物が所狭しと飾られており一同が圧巻溜息を漏らす。部屋

の奥へと進むと日本人形がぽつりと飾られていた。リクオが直ぐに魅琉鬼の袖を引っ張り耳打ちをする。

「（家の物にとり憑く妖怪ないていたかな）」

「（いえ、推測ですがこれは九十九神の類いだと思われます。リクオ様危険ですので、私の背後へ身をお隠し下さい）」

「なぁ……これほんまに『呪いの人形』なん？」

「信憑性は高いはずだ……持ち主の日記も一緒に預かったんだ。読んでみよう」

と、此処で清継が持ち主の日記を取り出してそれを読みだす。ちらりと横目で人形を見るとリクオは瞳を見開き驚愕し、魅琉鬼は袖に隠した小太刀に手を掛けて臨戦態勢を取る。

人形は血の涙を流し、髪を伸ばしながら尚も日記を読み続ける清継の背後から襲いかかった。リクオが叫び止めに入るがそれを遮るかの様に人型のお札が宙を舞い、人形を撃滅する。

爆煙が立ち込め皆が呆気に取られている間、魅琉鬼は片時もゆらから目を離す事なく睨みつける。

「（やはり陰陽師か……厄介ですね……抜けている様に見えましたが、かなりの手練かもしれません）」

氷麗に目を向けると顔を真っ青にして唇を震わせ驚愕していた。

「（やはり気付いていなかったのね……私が来て正解でした）」

正気を取り戻した清継が口を開きこう尋ねた。

「君は……『あの』花開院か！？」

「よう知っとるね……うちはこの浮世絵町に『ある妖怪』を封じに来たんや」

魅琉鬼の眉がぴくりと反応する。静かに殺気を放ちゆらを射抜いた。はっとなって振り向いたゆらだったが、にこやかに笑う魅琉鬼を見てほっと胸を撫で下ろすのであった。

「（早い内に潰しておいた方が良いかもしれなせんね……紛いなりにも花開院の頭首候補……万が一リクオ様に牙を剥くようならば、頸を刎ねる事にしましょう……花開院を敵に回すのは痛いですが、私が皆殺しにすれば済む話。……ふふ）」

満面の笑顔の裏、その牙を覗かせる鬼が其処に居た。

確信（後書き）

あと二回くらい更新したら魅琉鬼無双やる予定です

感想お願いします

逆鱗（前書き）

魅琉鬼さんＴＵＥＥＥＥする話し。リクオ君の出番を取る上に久々の無双です。嫌いな方は御遠慮下さい。

戦闘シーンが上手く描けぬ。

逆鱗

「なりませんぞ若―！！」

大広間に烏天狗の悲鳴にも似た声が響き渡る。リクオを始めとする小妖怪共も耳を塞ぎ驚いていた。額に汗を掻きながら、気まずそうに視線を落とすリクオ。膝の上で拳を握り、悔しそうにしている。握りしめた『回状』がくしゃりと潰れた。

「この回状は正式な物ですぞ！　破門状と同じで撤回する事など出来ないのです！　先の覚醒の折、三代目を継ぐというお言葉は嘘だったのでございますか！」

リクオはたじろぎ蚊の鳴くような声で呟いた。

「それは……本当に覚えていなくて……」

「話は聞いたぞ。リクオ。こっちへ来なさい」

突如後ろの襖が勢いよく開き、ぬらりひょんが姿を現す。その隣には『化け猫組』当領良太猫の姿もあった。

胡坐を掻きながらリクオから手渡された回状を読み終わると、躊躇う事なくこれを破り捨てた。目を見開き抗議の声を上げるリクオに渇を入れるぬらりひょん。その迫力に押し黙って悔しそうに唇を噛む。煙管を吹かし、睨みつけて言い放った。

「情けねぇ……鼠如きのいいなりになってんじゃねぇぞ」

頭に血が上ったリクオが溜まりに溜まった不安や不満を一気に吐きだした。

此処で静かに障子の戸が開く。怪訝そうな顔をしてリクオの前に正座した。

「リクオ様……頬の傷はどうなされたのですか？」

「こ、これは……！！」

慌てて傷を隠すリクオ。視線を逸らし、白状した。

「カナちゃん達を助けに行った時に……」

瞬間、場の空気が急激に凍る。溢れ出す殺気と怒気が木々を揺らし、鳥達を怯えさせ誰もが冷や汗を流す。ゆっくりと立ち上がり、無言で障子の前へと佇み、振り返った。

「お爺様、私に旧鼠組殲滅の許可を下さいませんか……今晩の内に溝鼠を処理させて下さい……宜しいですか？」

「好きにしな……」

魅琉鬼はにっこりと微笑み部屋を後にした。障子が閉まると同時に金縛りが解けたかの様に皆脱力し汗を拭った。良太猫は先程まで憎んでいた旧鼠に同情すら覚えている。これから起こるであろう一方的で、残酷な殺戮を想像すると背筋が凍る思いだった。

「ま、まさか……魅琉鬼の奴一人で……」

リクオ様に傷を付けた……くくっ……はっ……ははははは。あっははははははは！！！！！

そんなに死に急ぎたいのかしら……あぁ……早く、早く殺さなきゃ……あの臭い身体から一体どんな血が流れているのかしら？　フフフ、死すら生温い……あぁ、あぁ……久々だわ、こんなにも殺したいと思ったのは……。

私は、胴着に着替え漆黒の羽織を纏い一本の太刀を手に取ります。この子を使うのは久しぶりね……貴方も嬉しいの？　大丈夫……慌てなくても沢山血を吸わせてあげるわ……

庭へ出て抜刀の構えを取ります。神経を集中させ刃物の様に研ぎ澄まして鞘から一気に刀を抜き素早く戻すと飛んでいた烏が血を噴き出しながら落ちて来ました。

あら……ごめんなさい……殺す気なんてなかったのに……ダメね……興奮しすぎたみたいだわ、きっと酷い顔をしているでしょうね……。

「……雪那」

名呼ぶと共に豪風が巻き起こり雪那姿を現します。この子にしては珍しい程の怒り……そう、良太猫を傷つけられて怒っているのね……安心なさい。存分に殺すといいわ。

「さぁ……行きましょう……鼠狩りの時間よ」

＞i335543｜33314＜

玉座に足を組みにやけ顔でゆらを見る男。リクオに三代目から引きずり落とし、奴良組を乗っ取ろうとしている張本人旧鼠である。自身の死期が刻一刻と迫っている事なぞ知る由もない彼は勝利を確信してワイングラスに注がれた血を上品に飲んでいた。

「知ってるかい……譲ちゃん。人間の血ってのは夜明け前が一番うめぇのよ……丁度今くらいがな」

厭らしく舌舐めずりをして見下ろす旧鼠。周りに居る舎弟達も笑いだしゆらとカナの恐怖も頂点に達した時、外壁をぶち破る豪音と共に幾人かの手下が消し飛んだ。砂塵が鋭い銀影に切り裂かれる。驚いた旧鼠が慌てて振り返ると、其処には半身をどす黒い血で濡らした魅琉鬼の姿があった。

「これは、これは……半端者の婚約者殿じゃないですかい」

額に脂汗を滲ませながら、軽口を叩く。魅琉鬼は口の端を釣り上げ笑い近くに居た鼠の首を刎ね言い放った。

「臭い……臭い……溝鼠の臭いだわ……湯浴みしても取れそうにありません。ねぇ……雪那」

全身の毛を逆立てて唸る雪那。巨大な前足で鼠を踏みつけると、嫌な音を立てて血溜まりが出来た。

「て、てめぇ……こっちには人質が居るんだぞ！！！」

突如、肩を震わせながら腹を抱え、大口を開けて狂気に満ちた笑い声を上げる魅琉鬼。その場に居た全員に凄まじい怖気が駆け巡った。

「人質……ふはは……はは……あはっ！！　あっっはははは！
　ははは……ひぃ……ひぃ……それが何だというのです？　私にとってその二人は邪魔でしかないのですよ……寧ろ恋敵が減って手間が省けるわ……リクオ様が悲しむのは心痛めますが、私が優しく慰めて差し上げれば良い話し……」

「逝ってやがる……」

節々に呟かれ、どよめきが広がる。旧鼠は自身の身を守る事で頭が一杯になり、号令を掛け、雑魚共を嗾ける。抜刀の構えを取り逆手に取った達を乱れ振るうと空気を切り裂く音と共に一面に赤い液体がこびり付く。

しかし誰ひとり死んではおらず、悲鳴を上げてのた打ち回る。心底楽しそうな顔をして嬲り死の恐怖に怯える鼠共を惨殺する。

雪那は、咆哮を上げて食いちぎり、肉塊と化した其れを放り投げては切り裂き暴れまわっていた。

「余り散らかしてはダメよ？　掃除が大変だわ」

『良太猫様、傷つけた……こいつら許さない……！！！』

「あら、あら、私の言葉も届かないみたいね」

腰を抜かした鼠が、後ろへ後退する。魅琉鬼に見下ろされ蛇に睨まれた蛙のように動かなくなって口を開け、惚けている者に容赦なく突き刺し、刃を回して抉る。

けたたましい音をたて吹きだす血を浴びながら蕩けた様な顔で微笑む。

気が付けば旧鼠人だけになり怯えながら命乞いをしていた。

「たたた、助けてくれ！！　わ、悪気はなかったんだ……！！」

三流台詞を吐きながら怯える鼠を見下ろしながら、小さ呟いた。

「――――……死ね」

百鬼夜行が往来する霧で姿を隠し、目的地へと歩く一行の前に返り血で真っ赤に染まった魅琉鬼と雪那が姿を現す。背には気絶したゆらとカナ。

リクオが笑みを浮かべた。

「その様子じゃ、一匹も残してなさそうだな……物足りねぇ気もするが……その分お前が相手しろよ?」

「勿論です……リクオ様……」

逆鱗（後書き）

ずっと魅琉鬼のターン。

辛口コメントでも何でもどうぞ感想を下さいませ

看病（前書き）

復帰後最初の更新。
リクオが看病される方にしようかなと思いましたが変えました。
久々の更新で不安一杯！

看病

「リクオ……リクオ……起きなさい」

誰かが僕の肩を揺らしている。もう朝になったのだろうか？　まどろむ意識の中、僕がゆっくりと身体を起こして目をこする。段々と意識が覚醒していく。あれ？　母さん？　てっきり魅琉鬼かと思った。珍しいな……。

僕は心の中で少しだけ、寂しい気分になってしまう。それを察してか母さんがくすくすと笑いだした。見透かされた！　と思い、恥ずかしい気持ちで一杯になる。僕は赤くなった頬を隠すようにそっぽを向いて尋ねた。

「め、珍しいね……！　母さんがお越しに来るなんて！　あ、あの、魅琉鬼は？」

「くすっ……残念だったわね。……魅琉鬼ちゃん、風邪を拗らせっちゃったみたいで……本人は大丈夫だって言うけれど、無理やり寝かせて来たわ」

僕は居ても立ってもいられず、部屋を飛び出して行った。母さんが何か言ってた気がしたけど、今はそれを気にしては居られない。あの子が風邪を引くなんて初めてだ。呑気に寝てる場合じゃなかった！！　僕は息を切らせながら勢い良く障子を開ける。

「魅琉鬼！　大丈夫！！？」

「わ、若！？」

毛倡妓が驚いているのを無視して急いで駆け寄った。頬は赤くなっていて息も荒い。汗も沢山出ていて苦しそうだった。閉じていた目を薄らと開いて微笑む魅琉鬼に僕の心臓は大きく脈打った。

「おはようございます……リクオ様……今朝は起こしに行って差し上げられず、申し訳ございませんでした……少々お待ち下さいね……直ぐに朝食の用意を致しますから……」

そう言って起き上がろうとした魅琉鬼を僕は怒鳴りつけた。全く少しは自分の身体を労わってくれ！！

「何考えてんだよ！　魅琉鬼。そんな状態じゃ無理に決まってるだろ！」

「そうよ。病人は大人しく寝てなさいな」

毛倡妓が呆れ顔で溜息を吐きながらそう言った。魅琉鬼は今にも泣きそうな顔をして僕を見つめる。うっ……そ、そんな顔したってダメだぞ！　今日は絶対安静にさせないと。

「若……そろそろ学校へ行く支度をしないと間に合いませんよ」

「今日は僕も休むよ。母さんにそう言っておいて」

毛倡妓は『やっぱり』と言う顔をして溜息を吐いた。魅琉鬼も相当驚いた顔をして僕を見つめている。僕は魅琉鬼の細くて白い綺麗な手を握ってこう言った。

「今日は僕が一日中看病してあげるからね！」

桃色だった頬が一段と赤く染まっていく。こういう所は分かりやすくて可愛いんだよな……さて、僕はお粥でも作るかな。

私ったら何て失態を……リクオ様の手を煩わせてしまうなんて……はぁ……やはり少々強引に封印を解いてしまったからかしら……力は戻りつつあるのは自覚していましたが、身体の方が持たなかったようですね……気を付けなければ……恐らく、先日の旧鼠組の一件、幹部の何者かが裏で手引きをしていたに違いないでしょうが、こうも内部で敵が多くては……何か早急に手を打たなくては……。

「邪魔するぜ……」

「鳩様……」

私の前に胡坐を掻いて紙袋を放って来ました。何ですかその腹立たしい笑みは……刻みますよ。案の定ここぞとばかりに私に嫌味を言ってこられました。

「ざまぁねぇな……『椿の鬼姫』ともあろうお方がよぉ……まさか……ぷすぅ……風邪なんてよう……」

私は枕元に置いてあった小太刀を首筋に向かって投げ飛ばしましたが惜しくも躱されてしまいました。チッ……意外にカンが良いですね。本気で殺るつもりでしたが。

「何すんだてめぇ！！！　あとちょっとでお陀仏だったぞ！！」

「あら、申し訳ございませんでした。丁度蠅が煩かったものですから」

「お前、これ、ホント、リクオにばらすぞ！！　猫かぶり女め！！　っておいー！！　何、人の大事な所に物騒な物投げつけてんだ！！」

一々煩い男ですね……どうせ、そんな粗末な物使い道はないでしょうに。

「魅琉鬼、お粥作って来たよ！　って鳩君。来てたんだ？　どうしたの？　汗びっしょりだよ？」

「ははっ……気にすんなよ……あと少しで俺の大事なアナログスティックがお釈迦になる所だったんでい……薬、ちゃんと飲ませろよ……じゃ、俺は寄り合い行って来るから」

「ありがとう鳩君！！」

「リクオ様……申し訳ございません……」

魅琉鬼が申し訳なさそうに目尻に涙を溜めて視線を逸らす。その顔に思わず見とれてしまっていた。何と言えばいいのか、とても色っぽいのだ。普段は着物を着ているせいか薄着である今は、その豊か

な胸が締め付けられていない分、強調されて見えた。

「あの、リクオ様……？　どうかなさですか？　顔が赤いですよ」

僕を上目使いで見上げ心配そうな顔をしている魅琉鬼。い、行けない！　去れ煩悩！！　こんな時に何考えてんだ！　僕は大きく頭を左右に振って煩悩を払いのける。蓮華で粥を掬ってから息を吹きかけて魅琉鬼の口元へ。気恥ずかしそうにしながらも、嬉しそうに食べてくれた。やっぱり、自分で作ったものを美味しそうに食べてくれるのは嬉しいものなんだな……。

「どうかな……中々作った事なかったから味に自信がないんだけど……」

「そんな事はありませんよ。とても美味しゅうございます」

満面の笑みで答えてくれた。そうか、よかった……僕は照れ臭くなって頭の後ろを掻いた。そう言えば、最近こうして二人でゆっくりするのは久々だな……不謹慎だけど、ちょっと嬉しいかも。僕は楽しくなってきて、思わずこう言ってしまった。

「ねぇ……魅琉鬼！もっと僕に出来る事ないかな」

数分後、僕は激しく後悔することになる。

「んっ……はぁ……はぅ……リクオ様……とっても上手ですよ……んっ……そう……優しく……ゆっくり……はぁ……」

どうしてこうなった！！　僕は、混乱する頭で必死にこうなった経緯を思い出そうとする。でも、目の前には魅琉鬼の白い軟肌が僕の手を吸い寄せるように広がっていた。

「はんっ……少々乱暴ですよ……リクオ様……女の肌は傷つきやすいですから、もう少し優しく……んっ……して……」

「ご、ごごごめん！」

「謝らずともいいのですよ……とても気持ちいいです……んぁ……」

僕は堪らず立ち上がってこう言った。

「僕！　み、水変えてくるね！！」

慌てて障子を閉めて呼吸を整える。はぁ……ただ、背中を拭いてただけなのに……どうして、ああも……くそう、散れ、散るんだ煩悩！！　僕はただ背中を拭いてるだけ！　拭いてるだけ！

はぁ……調子に乗ってあんなこと言わなければ良かった……それにしても、魅琉鬼の背中綺麗だったなぁ……それになんだかとても甘い匂いが……ってあぁぁぁぁぁ！　ホントに何考えてんだよ！！　これじゃ変態じゃないか！

んっ？　なんか裾が引っ張られてる……僕が後ろを振り返ると其処には両手でスケッチブックを掲げて居る雪那の姿が……果てしなく、嫌な予感がします。

『むっつりスケベ』

「ちっ……違うよ！！　ぼ、僕はただ……」

「若……」

僕の背筋に物凄い悪寒が走った。それは比喩ではなく本当に背筋が凍っていた。ゆっくりと振りかえると雪女の氷麗が黒い髪を逆立てて怒っていた。いつしか集まっていた妖怪たちが僕を白い目で見て居る。僕は無実だ！！

「若のどスケベ！！　エロス！！　変態ーー！　不潔よーーー！！」

「ち、違うんだってーー！！　僕は無実だぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！」

看病（後書き）

ゼンさんファンの人すいません！！
作者どうしても、あの銀髪天然パーマのカッコいいあんちゃんが頭をよぎるんですｗｗ
感想、ご指摘お待ちしてます！！

番外：接吻（前書き）

感想に第三者視点のいちゃラブをという要望が来ていたので応えてみた。

是非とも感想を下さい。お願いします

番外：接吻

「可哀そうに……こんなに血塗れになって……」

誰……？　私を呼ぶ声。透き通っていて、とても美しい声に霞む意識の中、顔を上げ私はその人を見つめる。人形の様な整った目鼻立ちに白い肌。その人はとても美しかった。けれど、同時に恐ろしいと思った。冷たく、光の無い瞳。髪や服にこびり付いた血。頬へと流れ落ちる血をぺろりと舐め上げて感情の篭っていない美しい笑顔を浮かべ、私を見下ろしていた。

「ねぇ……貴方……私と一緒に鬼退治へ行きましょう……貴方を苛めた怖い、怖い鬼を私と一緒に殺して回りましょう……さぁ……私の手を取って……」

「……っ！　……っあ……う……」

喉を斬られた所為か上手く声が出せない……私は懸命に手をの延ばす。もう肩腕は無い。痛みを通り越して何も感じなくなった手足。腹から流れる生温かな血。今にも途切れそうな意識を歯を食いしばって保つ。ひんやりとした手の感触。何か喋ってる……でも、私の意識は遠のいて行って……最後に目にしたのはその人の冷たい笑顔だった。

「ふふっ……頑張ったわね。御褒美に少しだけ私の力を分けてあげる」

小鳥の囀りで私は目を覚ました。縁側の下で大きく身体を延ばして、全身を震わせた。まだ陽は登りきっていない。そろそろお姉様が起きて来る時間だ。私は体制を屈めて高く跳びあがり、ガリガリ爪を立てる。この前は失敗してお姉様に叱られてしまった。失敗しないように気を付けないと。

暫くするとお姉様は戸を開けて下さり、私はすぐに肩へと飛び乗った。あいさつの代わりに姉様の頬を舐めた。擽ったそうにしながらも笑って私に挨拶を返してくれた。凄く可愛らしい笑顔。ここ何年かで姉様はとても変わった。以前は無感情で冷たい笑顔しか浮かべて居なかったのに……今は感情豊かになってる。それは私にとってとても嬉しい事。

「刹那。おはようございます……こら、いつまでも甘えないで？
さ、朝食の準備に行きますよ」

少し名残惜しいけど仕方がない。素直に肩から降りて人の姿へと変化する。うぅ……やっぱり耳が猫のままになっちゃった……。姉様や氷麗さんみたいに上手く化けられれば一緒に学校へ行けるのに……そうしたらもっと姉様をお手伝いできるのに……。

「そんなに気を落とさないで……貴方が一生懸命なのは知ってるわ、大丈夫。ちゃんと出来るようになるわ……そうしたら私と一緒に学校へ行きましょうね」

私に優しい笑顔を向けてくれる姉様。はい！　私、頑張ります。

「その意気よ。さ、若菜様をお待たせする訳にもいかないわ」

そう言って台所へ向かう姉様。凄く嬉しそう。やっぱりあの御方の朝食を作るからなのかな？　活き活きして見える。そう……魅琉鬼姉様がこんな風に笑えるようになったのは、きっとあの方のお陰。私の方がずっと近くに居たのに、こんな風に笑った事はなかった。少しだけ悔しい。でも、それ以上に感謝している。こんなに幸せな顔私ではさせてあげられない。

そう……リクオ様でないと、姉様はきっと満たされない。それはきっと凄い事。

若菜様と並んで料理をする姉様はとても可愛らしい。鼻歌を口ずさんで笑顔を浮かべて、料理をしている。お弁当箱に一品一品丁寧におかずを入れて、最後ににっこりと笑った。姉様と私は繋がっている。溢れてくる感情はリクオ様への愛情なのか……温かい物。少し羨ましい。不器用な私は料理は出来ない。前に良太猫様に差し入れをと思い作ったら失敗してしまった。

恥ずかしくて渡せなかった。私も良太猫様に手料理食べて欲しいな……喜んでくれるかな？　私も頑張らなきゃ！

朝食とお弁当を作り終えると、姉様は嬉しそうにリクオ様を起こしに行く。ついて行きたいけど、邪魔しちゃダメだよね。残された私は若菜様と一緒に食器を並べたりした。若菜様はいつも褒めてくれる。皆私を怖がって避けているのに。頭を撫でて笑いかけてくれる優しい人。リクオ様はきっと若菜様に似たのだと思う。

遠くから二人の笑い声が聞こえて来た。リクオ様が起きたみたいだ。ね、姉様……朝からそんなエッチな事したらダメだと思います。わっ！　リクオ様簡単に押し倒されちゃった。そ、そんな姉様過激すぎますよ？　だ、誰か止めて！！　私、リクオ様の裸見ちゃう！あ、氷麗さんの足音。わわっ！今行っちゃダメ！　で、でも、止めないとリクオ様の……見えちゃう……。

障子の戸が開いた瞬間、私は耳を塞いだ。

朝食を終えて片付けを済ませた姉様が制服に着替えをして私の名を

呼んだ。変化を解いて化け猫になる私……うぅ……そんなに怖がらなくても……はぁ……

「可哀そうに……こんなに血塗れになって……」

誰……？　私を呼ぶ声。透き通っていて、とても美しい声に霞む意識の中、顔を上げ私はその人を見つめる人形の様な整った目鼻立ちに白い肌。その人はとても美しかった。けれど、同時に恐ろしいと思った。冷たく、光の無い瞳。髪や服にこびり付いた血。頬へと流れ落ちる血をぺろりと舐め上げて感情の篭っていない美しい笑顔を浮かべ、私を見下ろしていた。

「ねぇ……貴方……私と一緒に鬼退治へ行きましょう……貴方を苛めた怖い怖い鬼を私と一緒に殺して回りましょう……さぁ……私の手を取って……」

「……っ！　……っあ……う……」

喉を斬られた所為か上手く声が出せない……私は懸命に手をの延ばす。もう肩腕は無い。痛みを通り越して何も感じなくなった手足。腹から流れる生温かな血。今にも途切れそうな意識を歯を食いしばって保つ。ひんやりとした手の感触。何か喋ってる……でも、私の意識は遠のいて行って……最後に目にしたのはその人の冷たい笑顔だった。

「ふふっ……頑張ったわね。御褒美に少しだけ私の力を分けてあげる」

小鳥の囀りで私は目を覚ました。縁側の下で大きく身体を延ばして、全身を震わせた。まだ陽は登りきっていない。そろそろお姉様が起きて来る時間だ。私は体制を屈めて高く跳びあがり、ガリガリ爪を立てる。この前は失敗してお姉様に叱られてしまった。失敗しないように気を付けないと。

暫くするとお姉様は戸を開けて下さり、私はすぐに肩へと飛び乗った。あいさつの代わりに姉様の頬を舐めた。擽ったそうにしながらも笑って私に挨拶を返してくれた。凄く可愛らしい笑顔。ここ何年かで姉様はとても変わった。以前は無感情で冷たい笑顔しか浮かべて居なかったのに……今は感情豊かになってる。それは私にとってとても嬉しい事。

「刹那。おはようございます……こら、いつまでも甘えないで？
さ、朝食の準備に行きますよ」

少し名残惜しいけど仕方がない。素直に肩から降りて人の姿へと変化する。うぅ……やっぱり耳が猫のままになっちゃった……。姉様や氷麗さんみたいに上手く化けられれば一緒に学校へ行けるのに……そうしたらもっと姉様をお手伝いできるのに……。

「そんなに気を落とさないで……貴方が一生懸命なのは知ってるわ、大丈夫。ちゃんと出来るようになるわ……そうしたら私と一緒に学校へ行きましょうね」

私に優しい笑顔を向けてくれる姉様。はい！　私、頑張ります。

「その意気よ。さ、若菜様をお待たせする訳にもいかないわ」

そう言って台所へ向かう姉様。凄く嬉しそう。やっぱりあの御方の朝食を作るからなのかな？　活き活きして見える。そう……魅琉鬼姉様がこんな風に笑えるようになったのは、きっとあの方のお陰。私の方がずっと近くに居たのに、こんな風に笑った事はなかった。少しだけ悔しい。でも、それ以上に感謝している。こんなに幸せな顔私ではさせてあげられない。

そう……リクオ様でないと、姉様は満たされない。それはきっと凄い事。

若菜様と並んで料理をする姉様はとても可愛らしい。鼻歌を口ずさんで笑顔を浮かべて、料理をしている。お弁当箱に一品一品丁寧におかずを入れて、最後ににっこりと笑った。姉様と私は繋がっている。溢れてくる感情はリクオ様への愛情なのか……温かい物。少し羨ましい。不器用な私は料理は出来ない。前に良太猫様に差し入れをと思い作ったら失敗してしまった。

恥ずかしくて渡せなかった。私も良太猫様に手料理食べて欲しいな……喜んでくれるかな？　私も頑張らなきゃ！

朝食とお弁当を作り終えると、姉様は嬉しそうにリクオ様を起こしに行く。ついて行きたいけど、邪魔しちゃダメだよね。残された私は若菜様と一緒に食器を並べたりした。若菜様はいつも褒めてくれる。皆私を怖がって避けているのに。頭を撫でて笑いかけてくれる優しい人。リクオ様はきっと若菜様に似たのだと思う。

遠くから二人の笑い声が聞こえて来た。リクオ様が起きたみたいだ。ね、姉様……朝からそんなエッチな事したらダメだと思います。わっ！　リクオ様簡単に押し倒されちゃった。そ、そんな姉様過激すぎますよ？　だ、誰か止めて！！　私、リクオ様の裸見ちゃう！あ、氷麗さんの足音。わわっ！今行っちゃダメ！　で、でも、止めないとリクオ様の……見えちゃう……。

障子の戸が開いた瞬間、私は耳を塞いだ。

朝食を終えて片付けを済ませた姉様が制服に着替えをして私の名を

呼んだ。変化を解いて化け猫になる私……うぅ……そんなに怖がらなくても……はぁ……。私ってそんなに怖いのかな？　納豆小僧さん……泣く事ないじゃない。

私は姉様を背に乗せて飛び立つ気配を消すのは得意だ。上空で姿を消し学校へと向かう。途中、リクオ様達に追いつくと、クラスメイトの家長カナと仲良くリクオ様が話しているのが見えた。リクオ様ったら、姉様が居るのに……私は気になって顔を盗み見るとややっぱり、その顔は微かに曇っていた。

仲が良いのは分かるけど、もう少し姉さまの気持ちも考えてほしい。よし！　此処は私が一肌脱ごう！！　そう決心して学校へと急いだ。

学校の屋上へと降り立ち、姉さまを降ろす。私が心配しているのが判ったのか、優しく頭を撫でてくださった姉さま。でも、その心は曇ったまま。

私は、気配を絶ってリクオ様を待ち伏せる。あ、来た！！　む、やっぱりちょっとデレデレしてる。御姉さまという許婚が要るのに！！　校門に差し掛かった所で私はリクオ様のすそを引っ張った。皆の視線がこちらへ向くが、気にしない。スケッチブックへ手早く文字を書いた。驚きに塗りつぶされるリクオ様の顔。私は構わず引っ張って人気のない所へと連れて行った。

「え？　今日は魅琉鬼と帰れって？」

リクオ様の問いに私はコクリ、頷いた。リクオ様は気恥ずかしそうな顔をして頬を赤らめた。何でそんなに顔を赤くするの！　一緒に帰るだけじゃない！

「で、でも……他の人もいるし、清継君達に捕まるかも……」

そう言って何やらもじもじし始めてしまった。もう！　言い訳は男らしくありませんよ！

『さっき、家長さんにデレデレしてた』

「うぇ！？　し、してないよ！　デレデレなんて」

『言い訳、かっこ悪い』

ずるっと肩を落としてしまうリクオ様。私は構わず続けた。

『姉さま……悲しそうな顔してた』

「え？」

顔つきが変わった。この人もやっぱり姉さまが好きなんだ。

『貴方様から手を繋いであげて下さい』

「そ、そんな……ハードル高いよ」

『わ・か・り・ま・し・た・ね？』

「……はい」

陽が橙色に変わった頃。私はぬらり爺様の将棋の相手をしていました。胡坐を掻いて腕を組み唸る爺様。ふふ、負けず嫌いですね。煙管を口でくらくらさせながら、汗を掻き考え込んで……

「待った！　してくれんかの？」

『だめ』

「くわー！　もう一回じゃ！　もう一回勝負じゃ」

『もうすぐご飯』

丁度玄関の戸が開く音が聞こえて来た。私は駆け足で二人を迎える。その手は、しっかりと握られていた。爺様もやってきてほくそ笑むと何も言わず、部屋へ戻っていった。良かったですね。姉さま

帰ってからの姉さまは目に見えて上機嫌だった。夕食のおかずもリクオ様の分だけ一品多くてそれを見た若菜様は二人を見て微笑んでいた。あれ？　氷麗さんが不機嫌？　どうしたんだろ。

夕食が済んだ後、リクオ様は変化し、姉さまと二人広間で晩酌をし

ていた。私はこっそりと様子を伺いました。……二人とも幸せそう。一つの羽織を二人で近いリクオ様の肩に頭を預け、寄り添ってます……いいなぁ……私も良太猫様とあんな風に……

「今日はありがとうございました。とても嬉しゅうございました……」

「ん？　あぁ……お前が妬いてたって聞いてな……どうも昼の俺は情けなくていけねぇ……」

「もう……あの子ったら……そんな事はありませんよ……どんな貴方様も素敵にございます」

「そうかい？」

「ええ……私の方こそ、器量が狭くて……」

「気にするな……お前に妬かれるのは気分がいい……」

キャー！　キャー！！　リクオ様が姉さまの顎に手を添え、くいっと持ち上げました。イケー！リクオ様！！　もうちょっと！　あと少し！！　そして……。

「泣くこたぁねぇだろ？」

姉さまは自分の唇を指でなぞって、顔を真っ赤にしながら瞳に涙を浮かべてます……姉さま可愛い！！　リクオ様は少々困った様子で姉さまの体を強く抱きしめましています。

私はそのまま戸を閉めて二人の幸せを願い眠りに付きました。

番外：接吻（後書き）

番外で初チュウ。雪那は猫耳生えたままでいいです！！

感想お待ちしております

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7370s/

恋する赤鬼

2011年11月23日19時52分発行